

---

# 仮面ライダーBEST ~一番となる者のキセキ~

時流 明日無

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーBEST

〜一番となる者のキセキ〜

### 【Nコード】

N1916W

### 【作者名】

時流 明日無

### 【あらすじ】

ある世界、私達と同じ様に時が進み、私達と同じ様に物が動き、私達と同じ様に明日がある世界。テレビも私達と同じ様に放送されています。勿論、仮面ライダーも。

しかし、私達の世界には無いとされている仮面ライダーがその世界にはいました。物語がはじまる、その時までは人知れず、人々を守っていました。

彼は一番となる者。総ての一番となる者。

これは、ある世界で、起こった仮面ライダー達の物語。信じるかは

…自由ですが。

## 登場人物&オリジナルライダー紹介（前書き）

本作オリジナルのキャラ達の設定の要約を公開します。

随時更新する事があります、ご了承ください。

## 登場人物&オリジナルライダー紹介

高見大智 (Daiti Takami)

本作の主人公であり仮面ライダーBEST。年齢は多分17。渚沙高校の二年生。

成績はイイらしいが英語と芸術がニガテらしい。理系。

冷静沈着で確実な策などは得意だが危険を犯す行為はあまり好きじゃない奥の手タイプ。

本作開始までずっと一人(と三体)で戦っていた。本作開始までに封印したサイラは75体。

佐原麻衣 Mai Sahara

本作の主人公その2。年齢は恐らく17。渚沙高校の二年生。

成績は大智より少し下。文系。しかし社会がニガテらしい。

基本的に活動的で笑顔明るい感じ…？

“カフェくりいむ”のおつきなしゅうくりいむが大好きで海斗と頻りに食べに行く。

一之瀬海斗 Kaito Itinose

本作の主人公その3。年齢は確か17。渚沙高校の二年生。

成績は平均くらい。主教科より副教科の方が成績がいいらしい。文系。

好奇心旺盛であり、少年のような心の持ち主。もちろん仮面ライダーについてもある知識がある。

また、“海野流合気道術”という合気道に心得があるようでサイラ相手でも生身で退ける程度の技を持つ。ちなみに海野流合気道術は

海斗から15代くらい前の先祖、海野重成（この人の孫の代から名字を一之瀬に変更）が編み出した合気道術のようです。

ツバサ                    01-system      Tubasa

TAKAMI LABが開発した高性能次世代型ロボットの初号機。初号機ではあるがその性能は02及び03に負けず劣らずである。仕事にはマジメで主に情報収集、処理を行い、渚沙市の対策マップや戦略的な策を巡らせている。（現在では隣接する市についてもそれをしていることが判明）

またG5装着員として後方支援も担当する…が、G5の資格条件を知らなかったことを踏まえるとそこまで専門的にG5を知らずに戦っているようです。

海斗とはかなり仲が良いよう。

エリカ                    02-system      Erika

同研究所が開発したロボットの二号機。

研究所内のデータ管理と金銭管理をしている。しっかり者でお母さんの存在だが、接し方が友人的存在であるためそれが目立たない。またG5と直接連絡をとったりサイラ感知装置も担当している。麻衣とはかなり仲が良いようだ。

ダイキ                    03-system      Daiki

同研究所が開発したロボットの三号機。

研究・開発部門担当。大智に開発や研究について教えたりG5強化や大智の父さんが残した開発プロジェクトを進めている。料理が趣味。ロボットにも趣味あっていいじゃ無いですか。腕前は余裕で店出せるほどだが当の本人（本体？）は「俺の料理には温もりが無い」と言う。

G5装着員として後方支援も担当する。

原 啓介 Keiske Hara

渚沙署未確認生命体対策班所属の刑事。36歳。

元は殺人事件を担当していたが2010年に未確認生命体に対する措置としておかれた対策班に異動となる。

幼少期にスカイライダーやスーパー1などを見て憧れていかがそれは昔の話。今は仮面ライダーなど信じてもない。  
BESTや大智達を怪しく思っている。

西村 誠 Makoto Nishinura

内閣情報調査室特殊科に属し主に渚沙市未確認生命体事件について調査をしている調査官。28歳。

高見誠司を少し尊敬していると思われるが本当はどうか分からない。  
銃はあんまり好きではないが結構上手い。「もうこいつがG5装着しろよ」状態だが、残念、彼もG5は装着できない。

仮面ライダーはBLACK世代でないかと思われる。

仮面ライダーBEST

本作オリジナルライダー。

様々な記憶を使って大智が変身する。

ベストフォーム

“一番”の記憶の変身体。

基本的に相手の出方を探れるベースフォームとなるのでまずはこれに変身する。

黒くスタイリッシュなボディが特徴。

イメージとしては仮面ライダージョーカーと今作のサブテーマ、陰陽師を合わせた感じですよ。

使用可能カード：この他にもあります、がそれは出てきてからの楽しみ

BEST Attackカード：ライダーパンチ

BEST Final Attackカード：BESTキック

リーフフォーム

“森林”の記憶の変身体。

銀に緑のラインが入って鮮やかな色合いとなった鎧の様なボディが特徴。その見た目通りボディは強固でありそんなじゃそこの攻撃では倒れない。ただし、動きが遅くなる。

また専用武器、“フォレッサーソード”による近接攻撃を得意とする。

使用可能カード

LEAF Final Attackカード      リーフクロスフォース

(フォレッサーソードによる十字斬り)

仮面ライダーG5

・仮面ライダーG5

高見誠司が仮面ライダーG3-Xを参考にして作り上げた多目的用特殊装甲具。G3-Xの問題点は装着や武器の交代がいちいちドックに戻らなくてはならない事で無いかと考えたため転送装着を付けたのでG3-Xより重装備となった。ツバサは主にこちらで戦う。最大稼働時間は二十四時間。

・仮面ライダーLostG5

G5の装甲を大幅に削減した姿。攻撃力、防御力、稼働時間など様々な性能が大幅に落ちる上、使用不可武器があるなど大きなリスク



があるが俊敏性などが上がって連打を叩き込む戦法が得意。ダイキは主にこちらで戦う。

最大稼働時間は30分（これからもっと長くなる可能性あり）

G5系統専用武器

G-01ショット

## 登場人物&オリジナルライター紹介（後書き）

最後に…

何度かチェックはしておりますが、本編中に誤字等ありましたらご報告下さい。お願いします。

## 序章

??「はあ、はあ、はあ・・・」

夜、一人の女性が街灯もまばらな道を走っている。

タン、タン、タンとほぼ規則正しくアスファルトを踏みつけながら薄暗い雨の中はしっている。

体力も限界に近いだろう。

だが、なにかにおびえるように震える両手を握り締め走る、走る、走る。

??「はあ、はあ・・・ふう・・・」

ここまでくれば大丈夫・・・と自分に言い聞かせながらまだ荒い息を整えている。

少し雨もさつきから降っている。

見ると、この女性、まだ十代のような。

雨に打たれながら壁を背もたれに力なく立つ。

頭上の蛍光灯は点滅している。

早く逃げなくては・・・そう思いながらまだ荒れる息を整えている。

その時

「……?」はッ?逃げられるとでも?」

突然闇の中から現れた異形の者に抵抗する間なくのど元を絞められる。

苦しみながらもぐがが時すでに遅し。

異形の者は「ククク……」と笑いながら右手を握り締め振りかぶる。

チチチチチチ……プツン……

蛍光灯の灯りが完全に落ちた。

## 第一話      ライダー、登場

??「はっ!?!」

嫌な夢を見た…まただ…

最近あんな夢ばっか見る。

体調を崩したのだろうか?

もしかして、これが予知夢ってやつ?

あの女の人はどうなったんだろう…

様々な憶測が飛び交う…

母「麻衣、早く支度して学校に行きなさい!」

母の言葉で憶測の世界から引きずり出される

麻衣「はあい」

私は一階に降りた。

麻衣「遅れました、私は、佐原麻衣です。」

高校二年生、青春真っ只中。

私についてはこのくらいで…

私に通う学校、市立渚沙高等学校は私の住む渚沙の街の中央にあつて、市立ながら他の公立高等学校のような風潮は無く、ほとんど私立みたいに住徒は生活出来た。そのためわざわざ引っ越しやアパートを借りてまでここにこようとする学生も多いみたい。

ただ、渚沙市唯一の公立高校のため渚沙市の高校生は大体ここか、私立に行く。

渚沙市は小さな町でわないよ。  
むしろ、風都並みの発展をしている。風都との決定的な違いはあの巨大風車などの風車や遊園地が風都にはあつたが、渚沙市には水族館があるというところかな。

風都が風の都なら渚沙は海の都と言つべきだね。

…と、まあ、渚沙市の説明はこの程度かな？

??「さつきから誰と喋つてんの？」

麻衣「うわ!?!。…あ…海斗か…」

海斗「俺の扱い酷くない!?!」

あ、こいつは…

海斗「俺は一之瀬海斗!!麻衣と同じ高2!!よろしくなっ( ^ \_ ^ )」

麻衣「…はたから見たら変人だよ?海斗。」

しかもウイソクまで決めちゃって…

っていつかなんで私の心が読めたの!?

海斗「気にしたら負けだよ( ^ O ^ )」

麻衣「なんで読めたの!？」

ねえ、初回でもうこんなだなんて嫌だよ?これから続くの?...はあ...

ま、海斗は、小学校から一緒に家も近かったから付き合い長いんだ...ウザいと思う時(例、さっきの会話)あるけど、ま、いい奴だから憎めない...

??「おい、お前ら、このままだと遅刻だぞ？」

海斗「え!?!うわ、やべっ!！」

麻衣「あれ?大智くんにしては遅いね。」

あ、こいつは高見大智。高2

小学校のとき海斗と私と大智の三人で良く遊んでたんだ。中学校の時分かれちゃったんだけど高校で再会した...って感じかな。

確か中学校のときお父さんを事故で亡くして、今は生家にいる母親と文通でやりとりしながらアパート借りて生活してるらしい。

大智「ああ、ちょっとな。とりあえず、バイクある海斗はおいといて、麻衣、乗れ?じゃないと遅刻だ。」

ポンッとヘルメットを投げ渡され、私は衝動的にかぶりバイクにまたがる。

大智「しっかりつかまってる。」

麻衣「うん。」

海斗「あ、ちよっ!2人共!！」

麻衣「よし、やっと帰れるっ」

海斗「麻衣、帰りか？送ってやるよ。」

あ、ちなみに私達は部活をしていない。だけど補習で今はもう6時半だ。

大智はバイトのためにもう帰っている。

麻衣「うーん、お言葉に甘えさせてもらおうかな？」

海斗「んで、途中で「カフェくりいむ」によってシュークリーム買  
うか？」

麻衣「だね あそこのシュークリームホント美味しいからね。」

早くいこ」

海斗「あ、ちよつまで！！麻衣！」

いつもと変わらない何気ない会話。

だったのに…

—————

カフェくりいむは渚沙市で知らない人はいないくらい有名な洋菓子店で、中でも「おつきなしゆうくりいむ」は一日千個以上を売り上げる人気商品。混んでいたけど、そこは海斗がパツパツと慣れた手つきでシュークリーム3個を買ってくれた。

海斗「はい、シュークリーム。」

そっいいながら海斗はその一つにかぶりつく。

麻衣「ありがと。ん〜！美味しい！！」

海斗は終始笑顔でシュークリームをたいたらげると「よし、帰るか」と言ったので私も店をでた。ちなみに残りの一つは私の分である。



海斗「明日は休日だあゝ 学校ないゝ」  
と鼻歌交じりで駐車場につく…が、

??? 『グガガッ』

突然、怪物があらわれ、襲いかかってくる。

海斗「あぶねっ！何だこいつ…一体何が起こってんだ…」

海斗が呟くようにいう。

しかし、目の前の怪物…よくみたら蝶のようなのに人間の形をした怪物はなおも襲ってくる。

海斗「まずい、逃げろ！」

海斗の叫びで私は我に帰る。

そしと全力で海斗と逃げた。

夢で見たあの風景と同じ道を同じように走って逃げる。違うのは海斗の存在だけ。

麻衣「はあっはあっはあっ…」

もうどれだけ走ったんだろう…

海斗「麻衣、こっちだ！」

海斗がいったところは夢でみたあの路地裏だった。

頭上には切れかけの街灯がある。

麻衣「はあ、はあ、はあ」

海斗「ここなら少し…休める…だろ。」

海斗は壁にもたれかかっている。

麻衣「それより、あれは何？」

海斗「知るわけもない。当然「知るか。」と返された。

海斗「でも、殺意があった。あいつには。」

麻衣「妖怪…ぼくないし…」

怪物『おや、ずいぶん楽しそうだなあ。』

いつの間にかもう2mまで近づいていた。逃げたい、でも足が動かない？

海斗「おらああああ！」

海斗が体当たりをしかける。が、怪物はもろともせず、海斗を叩きつける。

海斗「ぐっ!？」

海斗は立ち上がり「麻衣、逃げる!」と叫び、またタックルをしかける。

…また地面に叩きつけられる。

海斗!？止めて、止めて、もうやめて!

海斗が死ぬなんて…

麻衣「止めて!！」

怪物『うるさいなあ…楽しませてよ?君たちはテラのために死ななきゃならないんだよ?おとなしくしてよ。』

テラ…？何それ？

一瞬気を取られた、そのとき、

怪物の左手は私の首をつかみ締め上げている。

麻衣「あつ…あつ…」

息苦しい…死んじゃうの？私。

海斗「おおおおお！」

海斗がまたタツクルしようと走ってきたが、怪物は右手でかるく払い、海斗は地面に屈した。

海斗？なんで地面に倒れてるの？なんで立てないの？なんで？なんで？

麻衣「あつ…」

私のせいだ…私を助けようとして、海斗はボロボロになったんだ…  
私が…私が…

怪物『ふっ…君たちは面白い。だが、ここまで…ぐっ！？』

突如怪物はくるしそうになる。

タンつと大きな音がした、また怪物が苦しむ。左手も私から離れた。私からは力無く倒れ、音のした方を見る。

タツタツタツタツ…

ピタツと四つの足が止まる。

右側には青を基調としたまるでロボットみたいな装甲をした足二本。左側には黒を基調としたスタイリッシュな模様をした足二本。

それぞれ形状は違うがベルトのようなものがをしてある。上半身は見えないが、2人はこちらをみているようだ。

怪物『なっ…かめん…らいだー…』

え！？仮面ライダー！？

第二話 高みを目指せ(前書き)

ツバサ「ツバサと〜」

ダイキ「…ダイキの…」

ツバダイ「…あらずじ劇場！」

ツバサ「いえいつ！」

〇( )〇

ダイキ「ムダにテンション高いな。」

ツバサ「だって僕たち初登場ですよ？」

ダイキ「お前は一話からちゃっかりでたじゃないか。」

ツバサ「てへっ(#^・^#)」

ダイキ「俺たちが誰か気になる読者は早速本編をチェックしてくれ。」

┌

ツバサ「…ダイキは『大人の都合』で今回で無いけどね。(^^)」

大智「…お前らな…あらずじをしっかり言えよ？」 2人にゲンコツ

ツバサ「すいませんでしたあ…。あらずじとしては、海斗さんと麻

衣さんが蝶っぽい怪物に襲われました…」

ダイキ「んで…闇の中から現れた2人とわ一体…ってとこだな。」

大智「それでは、仮面ライダーBEST、スタートだ」

## 第二話 高みを目指せ

怪物『なっ…かめん…らいだー』

麻衣「え…!？」

仮面ライダー？そんなわけない。

仮面ライダーはTVの世界のもの。この世界に存在するはずが無い。だけども目の前にいる2人は仮面ライダーそっくり…いや、そのもの。しかも右側のライダー？は幼い頃よく大智の家で三人でみた仮面ライダーG3に酷似しているように見える。

黒のライダー？「麻衣、伏せろ！」

え!？今、麻衣って???

一瞬疑問に思ったがすぐさま伏せた。

『P i P i』

甲高い電子音が聴こえる。すると青のライダーが連続発砲していた。全弾怪物に命中。

怪物は軽く吹き飛ばされていた。

すると黒のライダーと青のライダーが私の前にたった。「アイツは引き受ける」などの声が聞こえた。なにやら打ち合わせをしているみたい。すると怪物が立ち上がり、突進してくる。すると黒のライダーが走り出し、そのまま肉弾戦に。その間に青のライダーが海斗を救出し、私のもとに連れて来て「もう少しご辛抱下さい。」といつてから私達に背を向け、怪物に短銃みたいなもので発砲していた。

海斗「…ぐっ…麻衣…大丈夫か？」

麻衣「海斗！？うん、私は大丈夫！海斗は？」

海斗「うーん…軽い打ち身と脚に少しだけ切り傷が…ってとこだ。大丈夫。」

麻衣「良かった…」

ホントに良かった…海斗が…無事で…

海斗「…そういえば、あれは…？仮面ライダーなのか？！」

あ…流石だけ子供のまま成長したやつだ。仮面ライダーかもしれない2人にはしゃいでいる。

海斗「…あれ？でも…仮面ライダーがこの世界に存在する…のか？」  
麻衣「分からない。でも、今確かに仮面ライダーかもしれない2人が私達を助けてくれている…。」

海斗「うん…」

ふと視線をあちらにむける。

黒のライダー「はあっ！」

怪物『ぐあっ！？』

強烈な蹴りが入り、怪物がとんでいく。

黒のライダー「これで終いだ」

そういうと、腰にあった四角形の箱から数枚のカードが飛び出した。黒のライダーはその中からたった一枚を右手を振りかぶりながらと

り、その間、バツクルとも言つべき中央の箱状のものを今まで黒のライダーから見て左側が下に下がり右側が上に上がった斜め状態だったのを横一直線にし、その箱の右上から左下にかけて入った割れ目にカードを通した。

『BEST Final Attack - Card Charge!』  
電子音と同時に黒のライダーはバツクルを左側が上右側が下の斜め状態にする。

『3・2・1』  
バツクルがカウントをする。

黒のライダー「ライダーキック…!!」  
と叫んだあとバツクルを左側が下右側が上になるようにする。

『GO!!』  
電子音がそう響くと黒のライダーは高くジャンプしキックの体制にはいる。するとライダーの周りに黒のエネルギーみたいなものがまわりつきそれと共に怪物にキックする。

怪物『ぐあああああ!?!』

どがあああああん!!とあらかさまな爆発音が響く。

黒のライダーはこちらに歩いてくる。

黒のライダー「麻衣、海斗、大丈夫か？」

麻海「え…?!」

おもわず海斗と八毛る。そりゃそうだ。私達に仮面ライダーの友人なんていないはず。すると黒のライダーはバツクルを横一直線に戻しバツクルをとる、変身解除をしたのだ。

麻衣「え…?!」

海斗「マジ?!」

そこにいたのは…



大智「大丈夫そうだな。」  
クスリと笑う大智がいた。

麻海「ええええええ！？」

「？？」ははっ！！当然の反応ですね！面白いくらいに」

青のライダーの方もいつの間にか変身解除をしたようだ。が、その顔に見覚えは無かった。

大智「紹介する。コイツは俺のサポートロボット、ツバサだ。」  
ツバサ「ツバサです。（^^）」

微笑みながら握手を要求するツバサ。私、海斗の順で握手するが、肌触り、温もりは人間だと私の脳は思った。だけどさっき大智はサポートロボットだと言った。ロボット…？この人が？

海斗「…本当に、ロボットなのか？」

大智「俺に人を雇える金があるか？」

いや、大智はたしか父親の財産を全て継いだはず。大智のお父さんはその道では有名な技術者で、数多くの発明をし、特許を得た人。お金に困ることはあまりないはず。人一人くらい雇っても支障ないはず。

ツバサ「どうでしょう？僕も信じられていないようですし。大智さん。あそこに彼らを招くと言っつのは。」

大智「そうだな。少なからず海斗達は知っておくべきかもな、色々。」

麻衣「え?!」

海斗「あそこってどこ!？」

大智「とりあえず、お前ら飯まだだろ？今日は俺ん家くるってことにして親に電話しといたらいんじゃないか？夜遅いし、今更帰ってもとくに麻衣なんか怒られるだろうから、泊まって行ったほうがいいだろうし。」

幸いウチは友人の家で泊まるとなっても反対されないし、夜遅く帰ると待ち受けるお叱りも無くなる。だから大智の提案はけっこうメリットがあるのだ。

だから大智の言うことに従うことにした。途中で、気になる箇所があったが…

麻衣「じゃ、泊めてもらおうか」

海斗「そうだね。」

そついいながら私達は親に連絡する。

麻衣「もしもし？お母さん？私大智に泊めさせてもらうから。」

母「大智くん家？いいわよ。夕飯は？」

麻衣「今からだよ。」

母「失礼のないようにね」

麻衣「はい。じゃね。」

ケータイを切る。

そして「なら、行くか。」と出発。私は大智の後ろ。海斗はツバサさんの後ろ。

途中、「カフェくりいむ」に寄って、海斗は自分のバイクに乗り換え三台のバイクで夜道を走る。

この日から私達の運命の歯車は少しずつ加速していった。

### 第三話 秘密の扉（前書き）

ツバサ「ツバサと〜」

大智「高見大智と」

海斗「一之瀬海斗の〜」

大智「あらすじ…」

ツバサ「さあ、お前の罪を数えろ！コーナー！！」

大智「ちがあああああう！！」

ツバサ「まず、大智は…」

海斗「俺が苦戦してた（？）のにカツコ良く登場しすぎ！」

ツバサ「一人でカツコ良く敵倒し過ぎ！」

海斗「何故か颯爽と現れて、颯爽と学校行き過ぎ！」

ツバサ「なんか」

大智「お前らが罪を数えろおおおおお！！！！」

ツバサ「殴られちゃった

海斗「上に同じく

大智「あらすじは…海斗と麻衣を襲った怪物を、黒のライダー？と青のライダー？が倒した。」

海斗「その黒のライダー？はなんと他でも無い大智だった！」

ツバサ「そしてなりゆきで海斗さんと麻衣さんは僕と大智さんと一緒…」

大智「さあ、スタートだ。」

### 第三話 秘密の扉

海斗の目

「つたく、大変な目にあつた…ついてねえなあ…  
そう思いながらバイクを走らせていた。」

「…俺は麻衣を助けられ無かつた。」

「それどころか麻衣までアイツに殺されかける目にあつた。  
大智がこなかつたら、俺は大切な人を失つていた。」

海斗「…」

「大切な人？いや、麻衣は麻衣だ。幼なじみで、幼い時から俺は振り回されてた。そんな麻衣が大切な人？いや、友人としては大切だと思つてる。だけど…」

ツバサ「どうしたんです？海斗さん。」

海斗「あ、いや…なんでも…」

並走していたツバサがクスリと笑う

ツバサ「…麻衣さんのことですか？」

海斗「!？」

おもわずツバサの顔を見てしまう。

ツバサ「危ないです、前向いて運転して下さい。」

海斗「あ、ああ。」

ツバサ「…凶星ですね？」

海斗「…」

ツバサは不敵な笑みを浮かべる。  
俺は…麻衣が……？

~~~~~

麻衣の目

ついたのは…

麻海「山じゃん!?」

今いる場所。それは渚沙市の中央にある浜音山の中腹だった。ちなみに私達の家からチャリで十五分のとこだ。

大智はただ私達の驚く様子を見て笑っている。

大智「まだ驚くなよ？」

大智は山肌のところにある機械に暗証番号をいれる。すると、そこまで山肌だったところ…大体横1m縦2mが開き、近未来的な通路が現れたのである。

麻海「……」

もはや啞然とするしかない。

中に入っていく。バイクも一緒に入る。すると目の前のドアがあいて更に中に入っていく。

大智「俺の研究室、TAKAMILABによっこそ！」

—————

入って啞然としていた私達を最初に迎えてくれたのはとつてもキレイな女の人だった。ちなみに、私は自分は普通だとおもっている。海斗は…小野寺ユウスケみたいな感じ。なかなかカッコイイ。大智

はモテるな〜って感じ。ツバサは長身。でも優しいってイメージのイケメン。

私達は長机の左側の2人掛けソファに2人で座った。

??「お茶です」

麻衣「あ、どうも。」

海斗「あざっす。」

女の人は私達と向かいの席に座る。その隣にツバサ。大智は私の斜め左、つまり全体を見渡せる位置にいる。

エリカ「私はエリカと言います。私もツバサとおなじサポートロボットなんですよ。」

ツバサ「あとあそこにいるダイキもサポートロボットです。ここに普段いるのはこの三人です。大智さんは学校があるので。」

奥にワイルド系イケメンがいた。あれもロボットらしい…ロボットだらけだ。しかも全員限りなく人間に近い。

麻衣「誰がなんのためにこんな設備、ロボットを？」

大智「今から説明しよう。分からない点もあるだろうが、とりあえず聞いてくれ。」

大智「超古代の話だ。人々は「楽」を求めていた。そして、人々は研究を始めた。長い時間がかかったが、当時のシャーマン達などが地球上の様々な物を「記憶」というものにして、そこからレジェンドと言う生命体を作り上げた。レジェンド達のお陰で人々は平和に楽に生活ができた。」

ツバサ「ですが、ある時、レジェンド達の中から「私達はそのまま自堕落な人間に尽くさなければいけないのか」と考える者が出て来ました。すると事態は急変。レジェンド達の一部が闇の力を持ったカオスとなり人々を襲いかかりました。人々は数多くの犠牲を出しながらカオス達を封印し、残りのレジェンド達と共に遺跡に眠らせました。」

大智「…しかし、カオス達は封印を解くことに成功した。これが今から丁度1002年前の事らしい。当時の人々は驚いた。多くの人が死んだ。天皇は慌て陰陽師達に退治を命令した。陰陽師達はまず、レジェンドをカードに封印し、次にこれ…BESTバツクルを作った。そして、「一番の記憶」が入ったBESTカードで変身した。仮面ライダーBESTの誕生だ。」

エリカ「BESTの活躍と同時期に陰陽師によって作られたもう一人のライダーの力によってカオス達は封印し直されました。しかし、その封印も完全で無かったのです。そしてついに2010年、カオスは復活しました。」

大智「しかし俺の親父は2007年、趣味の遺跡巡りでそれを知った。2010年に大惨事がおこる。親父は必死に政府に訴えたが聴き入れられず、ついに一人でここに閉じ籠ってしまった。仕方なく俺は母さんと引越した。」

だけど中3のとき、親父に呼び出された。親父はなんと俺が引越してからツバサ達ロボットと仮面ライダーアギトに出て来たGXを手本にして仮面ライダーG5を作り上げていた。そして、俺にBESTバツクルとカードの束とカードケースを渡してきた。多分親父は研究に没頭するあまり病に蝕まれていたと思う。俺は親父に一通り教わった。」

そして、カオスは復活した。」

最初、カオスと接触した時、俺はこの力を生かせず負けてしまう。」

その時、親父が楯となって殺された。」

ツバサ「その後、僕達は人知れず、カオス達の脅威と戦っているんです。」

…はつきり言って100%理解出来なかった。」

でもとりあえず分かったのはここはどうやら世界的に有名な科学技術者高見誠司…大智の父さんが作った事。このロボット達も含め…だ。」

そしてひょんなことから高見誠司はカオスとかいう怪物の復活をし  
り、できる限りの対応策を作った事。

そして、大智に託した事。

大智が仮面ライダーBESTになったこと。

海斗はそれを知ってか知らずか大智に質問していた。

海斗「じゃ、さっきのは何人かいるカオスってやつの人？」

大智「違う。あれはサイラ。カオスの下っ端の様なもんだ。サイラ  
もなんらかの「記憶」によって構築されているみたいだ。」

麻衣「なんでカオス達は人を殺すの？」

ツバサ「どうやら彼らはテラの再構成のために人類消滅を行って  
いるそうです。」

そういえばあのサイラもそんな事を言っていた様な…

海斗「テラ…？」

ツバサ「テラとは地球のことですよ。」

大智「地球温暖化、オゾン破壊、生態系の破壊、動植物の消滅…人  
類が生まれてから様々な「記憶」が滅び、今なお滅びていつている。  
だからカオス達は邪魔な人類を消し、新たな地球を作ろうとしてい  
るんだ。「記憶」を守る為に。」

… 人類の愚かさが招いたこと…

その愚かさの為私達は消滅しなくてはならないの…？

…

沈黙が続く…重い…重い沈黙が…



するとおもむろに大智が口を開いた。

大智「だが…俺達人類にはまだやるべき事があるはずだ。人類が出来る今からでも遅く無い、地球を救う手段はあるはずだ。」

一度一呼吸おいたあと声を震わせながら続けた。

大智「あと…あと、救える命を…傍観してしまって…カンタンに奪われるなんか…もう…もう絶対二度とイヤだから…そう、親父と約束したから…」

大智の頬に一粒の涙が伝った。

そして、無理に笑いながら、

大智「だから、俺は、最後まで戦ってやる。あいつらと。」

そう、宣言した。

#### 第四話 海斗、挑戦（前書き）

エリカ「エリカと〜」

大智「…高見大智と…」

海斗「一之瀬海斗の〜」

大智「あらす…」

エリ海「門矢士みたいに大体分かったらオツケイあらすじ!!」

大智「ちがっ…うくも無い!？」

エリカ「前回、やっと全初期設定主要キャラが登場しました。」

海斗「で、なんか大智の研究室にいつて色々な説明を受けました。」

エリカ「正直長かったでしょ？」

海斗「うん…長過ぎ。」

ツバサ「あと…海斗の心情が少し出ましたよ（ボソッ）」

海斗「なんかいった？」

ツバサ「いえ。」

大智「って！俺の出番は!？」

ツバサ「じゃ、スタートです。」

大智「っておい！俺のセリフ!!」

## 第四話 海斗、挑戦

<海斗の目>

話の後、俺達は夕食を食べた。そして、俺と麻衣はそれぞれ個別に部屋を借りた。

「ただ俺はツバサの部屋にいった。」

ツバサ「で、また質問ですか？」

海斗「いや、違う……」

ツバサはオフィスにありそうな回転できる椅子に、俺はベットに腰掛けた。

ちなみにこのベットは特別製で、ここで充電が出来るらしい。

ツバサ「じゃ、なんですか？」

海斗「いや……その……」

ツバサは意地悪く笑ってこう言った。

ツバサ「もしかして……麻衣さんの事？」

海斗「ちがっ!？」

思わず立ち上がってしまった。

ツバサ「動揺してますね。とりあえず座って下さい。」

素直に座る。

ツバサ「で、なんですか？」

海斗「……G5になりたいんだ……」

ツバサ「なるほど、さっき麻衣さんを守れなかったから今度は守りたい……と？」

ツバサはまた意地悪く笑った。

海斗「え!?!ちがっ……う?？」

ツバサ「ふふっ……あなたはわかりやすい人ですね。でも、面白いですね。分かりました、大智さんに言ってみましょう。」

海斗「ほんとか!?!？」

ツバサはドアを開け廊下にでる。俺もその後ろに続き大智の部屋に

行く。

-----

コンコン

大智「どうした？」

大智が顔を出す。そして俺達の顔を見て「やっぱりな」と言っている中  
に通してくれた。

俺達はソファに座り、大智はベットにあぐらをかいた。

大智「で、用件は…海斗がG5になりたいってことだろ？」

海斗「なんで分かった!？」

大智「正義感のつよい海斗のことだ。多分麻衣を守れなくて力を欲  
するに違いないと思っていた。」

ツバサ「なら話が早いです、許可を頂けますか？」

大智「ああ、勿論だ…だけど、お前、G5使えるか…？」

ツバサ「…え…!？」

大智「だから、海斗がああG5システムを使いこなせるか？」

ツバサ「ええ!？」

ツバサも驚いている。ツバサでさえ知らない事がG5にあるのか？  
大智「あのG5システムなんだが…今まで言っていなかったんだが、  
人間が使う時G5システムが拒絶する事があるんだ。そのせいで俺  
は勿論、親父も変身出来なかった。」

だから大智の親父さんは生身だったんだ…  
そしてカオスに…

大智「かくゆうBESTバツクルも拒絶反応が出る事が古文書に書かれてるがな。」

ツバサ「で…海斗さんは使えるんですか？」

大智「どうなんだろう…やって見ない限りには…やってみる？」

海斗「勿論！」

強く宣言した。

—————

シュミレーションルーム1と書かれたドアを推す。そして中に入り、バツクルを見直す。これが…G5…。

大智「いいか？使い方はさっき説明した通りだ。」

大智とツバサはガラスの向こうのシュミレーション補助ルーム1にいる。

ちなみにやり取りはマイクとスピーカーによって出来る仕組みになっている。

ツバサ「出来ます…かね？」

大智「そう祈るのみだ…」

シュミレーションルームに入る前、ツバサにみっちり教えてもらった。

まずバツクルを腰の部分にあてる。するとベルトが勝手に腰に巻きついた。あとはバツクルの数字入力キーを間違えないように…5・0・0…しっかり押した。入力時にP i P i P iと電子音が響く。すると変身待機音となる。

海斗「変身!!」

Enterキーを押す。

本来ならここでG5の各パーツが転送されるはず。だが…

海斗「ぐあ!?!」

壁に打ちつけられる。

シミュレーションルームはそんなに狭く無い。っていうかかなり広い。そんなところの中央から後ろの壁まで吹っ飛ばされた。体に激痛が走る。

大智「どうやら…拒絶されたみたいだな。」

いつの間にか大智が来てバツクルを俺から外した。

海斗「…もう…いつ…かいだけ…させてくれッ…!」

大智「…ただでさえお前はサイラにやられてるんだ。今日は寝ろ。もう10時半だ。」

海斗「…させてくれ…!」

大智「ダメだ。いまやったら最悪死ぬかもしれん。そうだったら守れるモノも守れないぞ。」

海斗「…ッ!?!」

俺は渋々大智のいうことを受け入れた。

俺はツバサに肩を借りながら部屋に戻った。「大智さんの言った通り、今日は寝て下さい。」と言われ俺はベットにのった。

今日一日ほんと色々あった。

すぐ眠りにつく事が出来た。

海斗「……ま……い……」

男「くそっあいつめ……あいつめえ……」

あいつさえいなければ……!

??『ム力つく奴がいるのか?』

男「!?!?だれだ……!」

??『だれ……そうだな、お前みたいなやつを救う神だ。』

神?そんなのが本当にいたのか?でも、神なら……!!

男「神!?!?なら、あいつ、東真を殺してくれ……!」

??『分かった、引き受けよう。』

神?は男に真つ黒なカードをぶつける。

するとカードからオオカミのサイラが表れた。

男「うっ!?!?うああ……!?!?」

??『さあ、こいつに命令しろ、そしたらその通りの奴を殺す。』

男「えっ……?そうなのか?……なら……東真を殺せえええええ……!?!?」

??『ふふふふふ』

第五話 ツバサ、自重して!! (前書き)

ツバサ「ツバサと〜」

海斗「一之瀬海斗の〜」

ツバサ「最近このコーナーで大智が激しく突っ込んでるよね?の会!」

大智「お前らのせいだろ!!!」

ツバサ「あと僕達このコーナーにすぎなんですよ。」

海斗「本当です、本当です。仮面ライダーBESTが完結する前に俺達死ぬんじゃないですか?過労死で」

ツバサ「僕はロボットなんで、スクラップですかね?」

海斗「そうなりますかね?しかし困りましたね。佐原麻衣氏なんて一度も出てないですよ?」

ツバサ「じゃ、次回佐原麻衣氏とエリカ氏にでもやって頂きましょう。」

海斗「ですね。あ、知ってます?大智って〜」

大智「いい加減あらすじをせええ!!!」二人にゲンコツ

注) 大智は普通標準語ですが、たまに関西弁になります。母親が関西人なんです。

ツバサ「…ロボット殴って…故障したらどうするんですか…?」  
頭をおさえる

海斗「…もうしません…おとん…」上に同じく

大智「誰が父親だ。」

ツバサ「…大智」

大智「…」殺気



ツバサ「ぜっぜっ前回の三つの出来事！」ブルブル

海斗「ひっひとつ！俺が仮面ライダーG5になりたがる！」ガク

ガク

ツバサ「ふっふたっ！海斗がG5システムに拒絶される！」ガク

ガクブルブル

海斗「みっみっみっみっ！」ガクガクガクガクガクガクガクガク

ガ（ry）

大智「みっつ。ある男に忍び寄る何かがある男の負の感情からウル  
フサイラを作る」

ツバサ「そっそれではスタートです！」

## 第五話 ツバサ、自重して!!

麻衣の目

ピピピピピピピピピピ

目覚まし時計の音で起きる。

あれ？私の部屋じゃ無い。どこ？

麻衣「あ、そっか…」

ここは…TAKAMILABだっけ？大智の研究所だね…確か。

コンコンッ

誰かがドアをノックする

麻衣「どうぞ。」

ドアが開く、そこにいたのは、ワイルド系イケメンなロボット、ダイキだ。

…ただ、ピンクのエプロンをしているが…

ダイキ「そろそろ朝食の…」

麻衣「ププッ！」

ダイキ「何故笑う!?!」

いや、笑うでしょ。

私はエプロンを指差した。

ダイキ「あ、ああ、コレか。他のMYエプロンが全部洗濯中なんだ。変か？」

変とかいうレベルじゃ無いです…

っていうかMYエプロンなんだ…

ダイキ「それより朝食が出来たから身支度出来たらきてくれ。じゃ。

」

麻衣「はい！」

朝食を取るため食堂に向かう。

…この研究所人数少ないのにどんだけ広いんだろ…

食堂に来て見るとエリカがいた。

麻衣「おはようございます。」

エリカ「あ、おはようございます。」

エリカの服装は夏らしいしま状のタンクトップにデニムだ。

エリカ「ぐっすり眠れました？」

麻衣「はい。なかなか。」

エリカ「それは良かった。あ、このルールとして基本全員でご飯を食べる事になってますから待ってて下さいね。」

こちら現場の佐原です。

さて、みなさん、どう思いますか？

明らか人間同士の会話としか思えないんですが、エリカ達はロボットです。

某二十二世紀からきたタヌキロボットが人間と同じものを食べているせいでロボットが、人間の食べ物を食べるのに抵抗が無い方もいらっしゃると思うのですが、果たしてロボットは人間の食べ物をエネルギーとしているのでしょうか？聞いてみたいと思います！

麻衣「…といますか…昨日も思ったんですが…」

エリカ「はい？」

麻衣「ロボットって…人間が食べるものからエネルギーを得るんですか？」

エリカ「あゝ、それですか。それは…」

?? 「僕がお答えしよう!」

そこには…

麻衣「…ツバサ…さん!？」

ツバサ「いえす」

なんと恐ろしく似合っているピ チュウのパジャマを着たあの優しい系イケメンのツバサがいた。しかも超笑顔…

こっこちら現場の佐原です!!

緊急事態が起こりました!!

ピカチュウ が現れました!

ツバサ「……んで、これのおかげで…」

なんとピカ チュウが説明しております!!

ツバサ「……と言うわけなんだよ」

麻衣「…ププツ」

海斗「あはははははは!!」

ツバサ「なっなんで笑うの!？」

終始満面の笑みで解説をしていたピ チュウツバサにいつものまにか来た海斗もひーひー言いながら笑っている。  
っていうか笑うでしょ!!

エリカ「あんたのパジャマに笑ってるんじゃない？」  
ツバサ「え！？……」

……着替えてくる！！」

エリカ「マシなのに着替えてきなよ」

敬礼をビシリと決めたあとツバサは慌てたように食堂を飛び出した。  
それを見送る間も海斗はゲラゲラ言ってる……

ダイキ「あれ？ツバサは？」　ピンクエプロン装備

エリカ「お着替え」

ダイキ「なるほどな」

エリカ「あなたもあなたでなんで第一印象崩壊エプロン付けてるの？」

ダイキ「他三着洗濯中。」

エリカ「……今までどこぞの天の道を往き総てを司る男やハーフボイルド探偵のイメージだったのに、どこぞの記憶喪失家政夫イメージがついちやうじゃない。」

ダイキ「フツ……どんなイメージを持たれようが、俺は俺だ。」

エリカ「……中身はどこぞの天の道を往き総てを司る男にちかいんだけどなあ……しかもダイキ、料理好きだし。」

大智「ふああああ……」

麻衣「あ！おはよ！」

海斗「おはよ、はははは……」

大智「ああ、おはよう。……海斗、何があった？」

麻衣「いや、実はね……」

ツバサ「僕、参上!!」

若干空気が凍る…

ツバサは電王でお決まりのポーズで立っている。

そして一同がツバサを見る。

確かに着替えて来た…きたんだが…

…そこにはやはり恐ろしく似合っているピユーのパジャマ?を着たツバサが立っていた。

ツバサ「着替えたよ…?」

麻海「ああはははははははははははは!!!!!!」

大智「…ナルホドな。」

ダイキ「…パジャマのままかよ…」

エリカ「…それあんまり変わってないんじゃないかな?」

大智「ツバサ…」

大ダイエリ「…自重しろ!!!!!!」



## 第六話 私のやる事（前書き）

麻衣「佐原麻衣と」

エリカ「エリカの」

麻エリ「「どきどき井戸端あらすじ会議！」」

ダイキ「『どきどき』ってなんだ!？」

ツバサ「あれ?最強のツッコミは?」

ダイキ「飽きれて外出。」

エリカ「麻衣ちゃんは彼氏とかいるの?」

麻衣「いないですう」

エリカ「え〜うっそ〜!麻衣ちゃん可愛いのに〜!」

麻衣「え!?!可愛い無いですよお」

エリカ「可愛いってえ〜!!」

麻衣「可愛く無いですってえ〜!!」

ダイキ「…あのキャピキャピ止めてくれ…」

ツバサ「…僕にはムリ。不可能です。」

海斗「…俺も…ムリ」

大智「…はやくあらすじ言え。」

海斗「大智おかえり」

エリカ「あらすじらしいあらすじなんて無いじゃないですか。前回」

麻衣「そうですよ!!作者がいけないんです!」

——本当に申し訳ない…ツバサが自重しないから…

海斗「あ、天の声（作者）が謝ってる。」

ツバサ「え…僕のせいなの?」



全員「」「うん、お前のせいだ」「」

「今回はちゃんと話進めたいと思います。では、仮面ライダー  
EST、スタートです。」



来てみるとエリカは一つのパソコンのに座りサイラの位置を特定していた。

その間にダイキ、大智、ツバサ、海斗と集まる。

エリカ「香月駅付近にサイラがいます！」

ツバサ「G5は…僕が装着します」

慌ただしくみんな動いている。私達はぼーっと突っ立っているだけだ。

すると…

海斗「俺に手伝えることってあるか？どんな些細なことでもいい、手伝いたいんだ！」

全員の動きが止まる…そして、

ツバサ「…どうでしょう、大智さん？先ほどまで海斗とG5の練習をしていたんですが、彼、G-51ショットは扱えるみたいなんです。ここは彼に牽制をやってもらいませんか？」

大智「…」

海斗「やらしてくれ！黙って見ていたく無いんだ！」

ダイキ「素人には危険だ！やらないほうが…」

大智「…海斗、頼んだ」

空気が凍る…

海斗「え？いいの？」

大智「勿論だ。しかも海斗の黙って見ていたく無いって言葉…俺も同じ気持ちだからな！」

海斗「ありがとう！」

麻衣「私は…」

大智「麻衣はここに残ってくれないか？」

麻衣「う、うん」

エリカ「みんなが帰ってくるのをコーヒーでも作って待ちましょ、  
ね？」

麻衣「そうですね」

というわけで大智、ツバサ、海斗が行く事になった。

私はただそれを見送っただけだ。

## 第七話 出会いと謎（前書き）

ツバサ「BESTっていう名前の意味は取り込まれた記憶が1番だからというのと、あともう一つ理由があるんですよね」

海斗「変身シーンがあれば分かるんだけど…」

大智「……orz」 今までの変身シーン無しに落ち込み

ツバ海「あれじゃ変身出来ない!」「」

天の声「おい、大智、変身シーン今回あるぞ」

大智「いやっふうふう!!」 復活

エリカ「とりあえず、軽くあらすじをいうとサイラがでたため大智、

ツバサ、海斗が行きました」

ツバサ「それでは、どうぞ!」

## 第七話 出会いと謎

### 大智の目

昨日、あれだけ止めたのに、また今朝やっていたみたいだな、海斗。

海斗「…？どうした？」

大智「いや？」

ツバサ「前向いて運転して下さい！」

…とりあえず、海斗の正義感に任せてみるか…

—————

狼サイラ『東真…お前は死なねばならぬ…』

東真「うつつわあああああ！？」

あのサイラの目的は東真という人の死か…？

とりあえず、止めるしか無いな。

あらかた人は逃げているみたいだ…

バイクで弾き飛ばしても大丈夫だな。

大智「おりゃ！」

狼サイラ『うぐっ！』

サイラはおそらく意外だったのだろう、たやすく吹き飛んだ。

ツバサ「狼…：…獣の力オスですね」

大智「だろうな、とりあえず、行くぞ！」

そう言いながらバイクからBESTバツクルを取り出す。それを腰の前にかざすとベルトが巻き付けられる。

そしてベルトの右側のボックスから一枚のカードが飛び出てくる。

それを右腕を大振りしながらとり顔の横までカードを持ってくる

大智「変身！」

BESTカードをスラッシュさせる。

そしてバツクルを俺から見て左側がしたになるように斜めに倒す。

BESTCard...Change!

音声の後、黒いエネルギーの塊の様なものが集まりそれが消える時には黒を基調としたスタイリッシュな仮面ライダーBESTに変身する。

右手人差し指をたて、天を差したあとサイラに指をさす。

BEST「BEST...つまり1番。俺は...1番となる者だ!」

狼サイラ『ふざけるのもここまでにしろ、お前達はいつまで邪魔をする!』

BEST「お前らが人間を殺さなくなるまでだ。人は間違いを犯す、だが、その間違いを挽回させる力を持っている。その力を信じられないのか!?」

??「ああ、無理だな」

声のした方を見る。

??「はっ」

BEST「ぐあ!?!」

海斗「大智!」

G5「はあっ!」

G5がG-53ランチャーで攻撃して相手が少し怯んだため距離をとり見てみると...

BEST「...!!お前は...!」

ビースト「ああ、ビーストだ」

海斗「あいつは...?」

ツバサ「獣のカオス、ビースト。大智の親父さんを殺した超本人です」

ビースト「お前ら人間は愚かだ、自分達はいざとなればスゴイ力を

發揮するなどを信じきっている。だが、お前らは一度でもその力と  
言うものを發揮できたか？今まで破壊しかしていないだろ？」

BEST「そっそんなことは…無い」

ビースト「ほう…自分達の利益のみ考え、ほかの静かに暮らしてい  
る生物を殺してきたお前らが、さらに事もあるうにお前達も含めた  
あらゆる記憶を作ってきた地球でさえも破壊しようとしているお前  
らが何をした？」

BEST「ぐっ…だが、人類は記憶を復活させるべく…」

ビースト「ほかの動物を実験台にし、さらにお前らが勝手に作っ  
たにすぎない遺伝情報を使って蘇らせようとしている…それが記憶  
の復活か？違う…まったく新しい、お前らに都合上のいい記憶の創  
造だ！」

BEST「…なっ…！？」

ビースト「しかも今では毎日の様に互いに互いの記憶を消しあつて  
るでは無いか！街には猛進する鉄の塊がうようよいる、海にも空に  
もだ！こんな人間がもたらすのは破壊と破滅のみ！」

BEST「ぐっ…」

ビースト「我々がしている事こそ正義。お前らは悪なのだ！」

BEST「ぐああっ！」

いきなり近づいてきたビーストが俺を蹴り飛ばし踏みつける。

そして足をあげ振りかぶった。

やられる…

バンバンバンバン！！

ビースト「ぐっ…」



海斗「止める！」

海斗はなおも撃つ、少々危なっかしいながらもけっこうあたってい  
る。

俺は前転などでもう一度で距離をとる。

ビースト「ぐっ…何かと思えば変身も出来ないただの人…くっ…  
こいつは!？」

海斗「はあっ！」

ビースト「ぐっぐあっ!？ちっ、似てる…かなり似ている…あいつ  
の子孫か!？だが、変身しないあたり今は脅威で無いな、はあっ！」  
ビーストが海斗めがけて飛んでくる。

俺はビーストの前にたち、キックをかました。

BEST「おりゃ！」

ビースト「ぐっ!？くそ、体制が悪すぎる…はっ」

そういうとビーストは消えていた。狼サイラもだ。

あいつらが逃げたあと、あいつが言った言葉を思い返した…

あいつの子孫か!？

変身しないあたり今は脅威で無いな

海斗に何かあるのだろうか…？

何か、恐れる様な力が…

## 第八話海斗とヒラメキと顔（前書き）

ツバサ「前回のあらすじ」

大智「あれ？今回普通だ」

ツバサ「とりあえず、ウルフサイラと戦闘中あらわれたカオスの一人、ビーストと交戦：かとおもわれましたが論破されやられる仮面ライダーBESTこと高見大智を一之瀬海斗が助けました」

海斗「普通にあらすじしたね」

大智「今回はマトモに前振りが…」

ツバサ「だけど、あの時サイラと交戦してた僕の描写無しってどういうこと!？」 天の声の首締め

天の声「あぐっ!?!あえぐひあべ!?!」

大智「おい、ヤメロオオ!?!?」

ツバサ「アイツかなりすばしっこかったですよ!?!かなりいい戦闘描写でしたよ!?!なんで?なんで!?!」

天の声「うぐっ……」 ぐったり

海斗「トドメ入ったああ!?!?」

ダイキ「…若干波乱な感じだが、きにせずどうぞ」

麻衣「気にするよ!?!」

エリカ（と、いうか、ツバサのキャラが本編、あらすじ、スピントフで変わり過ぎてるコトには誰もつつこまないの?）

## 第八話海斗とヒラメキと顔

### 大智の目

「あいつの子孫か!？」

「変身しないあたり今は脅威で無いな」

ビーストが言ったあの言葉…なんなんだ？

もしかして…

大智は依然考えを巡らしていた。

ツバサ「…あのう…大智さん、一応あいつらがどこに行くか、追わせた方が…」

大智「ん？ああ、そうだったな」

ツバサの一声で憶測の世界から引きずり出される。

俺はメモリーボックス…つまりカードケースの事だ。ここにBESTカードやらが入っているんだが、その中から2枚のフチが赤いカードを取り出した。

こいつはBESTカード等みたいに变身や必殺技を放つカードじゃなく、サイラ達の記憶と同レベルの記憶が封印されている。サイラも倒したら記憶に戻るからカードに封印し無いと十五分後に記憶が消滅し、その種族が、消えてしまうんだが…

ま、その話はまた今度としよう。どうせなら海斗と麻衣にも話した

いから。

この赤いカードに封印されているのはスズメとメジロの記憶。こいつらも以前サイラだったのを封印した。密偵にはもってこいだ。…タカとかがいい？いや、あいつらデカイから…

大智「さあ、ヤツらのあとをつけてくれ」

二枚のカードを投げたらスズメとメジロの二体の式神が出てきて飛んで行った。

ふう…あとは…あ、海斗忘れてた。

大智「海斗、大丈夫か？」

海斗「…あ、ああ…：…あつ、そういえば、あいつ、東つて人に執着してたような…」

大智「…おそらく、その東つて人を妬む負の感情と狼の記憶であるサイラはできたんじゃないか？」

海斗「サイラは負の感情から生まれるのか？」

ツバサ「はい。憎み、妬みなどの人の負の感情や、破壊されたモノの気持ち、苦しむ動物、自然の気持ちなどと記憶が交わり生まれるんです」

大智「サイラが生まれたら例えば特定のヤツを殺すなどのミッションがある。それが終われば後はそのサイラの意のまま殺人を繰り返す…」

海斗「なら作った後すぐ殺人鬼つて方がいいんじゃないか？あいつらにとつて」

ツバサ「でも今までその様な事例はありませんでしたから出来無い

と考えた方が無難です」

大智「サイラを使わずに殺すカオスもいるが…どのサイラもカオスも何故か一定のルールに従って殺しているように思う」  
ツバサ「謎だらけなんです」

そう、謎だらけ。

あいつらの事は何がしたいのか分からない。

ただ、言える事は、ヤツらは人類を滅ぼし、生物の記憶を守る事。それだけだ。

――――

## 海斗の目

大智がさつきから考え事ばかりしている…いつ帰るのだろう…

あ、そういえば、仮面ライダーオーズの時は確か人の欲望からヤミ―が生まれるんだっただよな…もしかしたら東って人に何か尋ねてみたら…

海斗「ツバサ」

ツバサ「はい？」

海斗「サイラって負の感情から生まれるんでしょ？」

ツバサ「そうですね」

海斗「なら、その負の感情を無くしたら力を失うんじゃないかな？」

ツバサ「…なるほど、確かにそうかも…今まで考えてもみませんでしたよ！」

海斗「よし、東さんに何か心あたりを聞いてみますか？」

ツバサ「ですね」

さてと、と言いながらかる―くまわりを見渡す。

あ、さつきサイラに胸ぐら掴まれた人がその場で呆然と腰をついてる。

海斗「…あの人が東さん？」

ツバサ「ですかね？」

海斗「聞いてみよっか」

ゆっくりと近づく。

そこには三十代だろうか？立派なみなりのビジネスマンだった。

…何処かで見た様な…？

海斗「すいません、東さんですか？」

東「はっはい…あのあなた方は？」

え！？…なんていえないのだろう…

高校生？なら話してもらえ無いだろうし、仮面ライダーって言った  
ら、余計たいへんな事になるかも…クウガの未確認生物四号みたい  
な感じで…

しかし、この考えはものの二秒で無駄となる

ツバサ「…私共は内閣情報調査室より依頼を受けた高見研究所の者  
です」

海斗「は…？」

東「は…？」

ツバサ「だから私共は内閣官房内閣情報調査室から依頼を受けた者  
です！」

俺は東さんに聞こえない様にツバサに

海斗「なんだ？それ。そんな組織あるのか！？聞いた事ないぞ！」

ツバサ「実際にある組織です。たまに僕達の研究所に依頼に来ます

から」

海斗「だけど……」

ツバサ「いいから任せてください！」

東「あのう……どうされました？」

海斗「いついえ！何でも！」

ツバサ「なにせこの者、初めてなもので……」

東「そうですか……」

やばい！めっちゃ疑われてる……

そもそも聞いた事の無い組織なんだ、疑うのも当然だな……

東「その内閣なんとかっていう組織は、何なんでしょうか？」

ツバサ「内閣の直下の元、日本国の色々な事を調べる機関です」

東「そんな機関が存在するんですね……？」

ツバサ「疑うのもムリ無いかと思いますが、実際にあります。しかし彼らだけで解決出来無い問題などがあります。そういう場合は私共の様な者や、霊能力者などの民間組織に依頼するんです。今回もそういうワケで少々お話を御伺いしたいなと……」

東「……失礼、私にも仕事がありますので……」

ツバサ「ちよつちよつとだけでも……」

東「……失礼します」

ツバサ「あ、あ」

海斗「すいませんでした！ほら、ツバサさん！」

ツバサ「え！？」

俺は嫌がるツバサを無理矢理引き摺って離れた。東さんの視線が痛かった。

ツバサ「なんですか！？もう少しで……」

海斗「いや、ムリだつて…怪し過ぎるし…」

あんな悪徳商法みたいなもの、信じる人なんてほとんどいないって…  
それにしても…何処かであの人…

海斗「ん？」

目に止まったのは駅前のモニター。何故かNHKがずっと流れているやつだ。

大智「さてと、帰るか」

ツバサ「海斗さん、帰りますよ？」

海斗「…」

ツバサ「海斗さん？」

大智「…おい、海斗！」

海斗「…あああああああ！！！！？」

そこには…

デカデカと東さん…っていつか東社長が出ていた。

大智「…ああ、確か、二十八歳でIT企業を起業、翌々年業界の業績格付け3位に昇りつめる若き天才…だっけ？」

海斗「あの東さんって…社長だったんだ…」

ツバサ「…敵が多そうですね…」

海斗「これは、話聞いても手掛かり無かったかな？」

大智「…何の話だ？」

海斗「帰りながら話すよ」

というコトで研究所に帰る事になった、それぞれにモヤモヤを抱えながら…



## 第八話海斗とヒラメキと顔（後書き）

海斗「…思ったんだ…」

大智「…何を？」

海斗「…ツバサ、なんであんなにブレるの？」

大智「…メタいが…昔はかなり真面目なツツコミ設定だったんだ…」

麻衣「…面影が無くなって…特にスピノフ…」

天の声「…だれか、ツバサを止めてください。出来るキャラを貸して頂きたいです…」

ツバサ「ヲイ」

天の声「ひい！」

## 第九話 記憶

これまでの仮面ライダーBESTは…

大智「もう絶対二度とイヤだから…そう、親父と約束したから…」

海斗「…G5になりたいんだ…。」

ツバサ「僕、参上!!！」

麻衣「私はただそれを見送っただけだ」

ビースト「今まで破壊しかしていないだろ？」

海斗「なら、その負の感情を無くしたら力を失うんじゃないかな？」

総ての記憶の…総ての頂点となれ！

大智「…なんで今回カッコつけてみたんだ？」

海斗「というか、なんでムダにイケイドなんだ？」

門矢士「正直それ思った」

麻衣「何故ここに!？」

大智「更にムダに海斗だしな」

海斗「あとツバサのあのセリフ…ツバサがバカやったときのだよな

？」

麻衣「今まで見るとサイラに対してやったみたいだな感じだね…」

参照

<http://ncode.syosetu.com/n1916w/6/>

天の声「ちなみにこういうタイプのあらすじ、今後は大きな意味で  
の一回に一回出す予定です。あくまで予定ですが…」

ツバサ「じゃ、スタート」

全「「「ライ」」」

~~~~~

\*現在、大智サイドでは海斗が東さんへの聞き込みを失敗したくらいです。

#### 麻衣の目

麻衣「大智達遅いなあ…」

あれから私はエリカさんとコーヒーいれたり（ちなみに大智は砂糖  
4個、海斗は砂糖無しが好き）またもや談笑してたりしていた。

エリカ「確かに今日は遅いですね…」

麻衣「いつもはもっと早いんですか？」

エリカ「ええ…今くらいにはコーヒーを飲み始めるくらいですね…」

麻衣「…そういえば…学校とかで、カフェテリアで大智と食事を  
とるんですが…大智、甘党すぎですよね？」

エリカ「あゝ確かにそう思いますね…私たちはあんまりコーヒー  
とか飲まないんですが…機械へのダメージ的な意味で」

麻衣「あー、食べ物類はOKでも、飲み物類はあまりとらない方がいいんですか？」

エリカ「水分量の問題なんですよね」

麻衣「なるほど」

また談笑がはじまる、すると不意にドアが開いた…入り口と反対側の。

ダイキ「…？」

麻衣「どうしたんですか？」

ダイキ「大智まだか？」

麻衣「まだですよ？」

エリカ「どうしたの？」

ダイキ「…いや、アップルタルトが出来たから、出来たてのうちに…と」

麻衣「…ホント料理好きですね」

ダイキ「大智の父さん、所長が料理ダメだったからな」

麻衣「なら何故その料理作る担当がエリカじゃ無いんです？」

エリカ「うーん…」

ダイキ「…作れるんだが、俺とこいつじゃつくられたのがエリカの方が早いから、エリカで出来なかった分をカバーした俺が1番上手い…と」

エリカ「ちなみに、ツバサがここの最初のロボットよ」

麻衣「…とすると、料理は…」

エリダイ「…かなり下手」

麻衣「…ですよね…」

ダイキ「うーん、とりあえず、保温しておくか…それとも冷すか…」

麻衣「コーヒー熱いですから…ぬくい方が温度差的に…でも冷えほ

うが好きです…」

ダイキ「なら冷やして来る」

麻衣「…ありがとうございます」

—————

麻衣「…まだかな…」

エリカ「もうそろそろだとおもいますけど…」

麻衣「コーヒーちょっと冷めちゃったですね…」

と、言っていたらまた不意にドアが開いた。入り口のドアが。

大智「ただいま」

ツバサ「たらいもー」

海斗「どこをどう変えたらそうなる!？」

エリ麻「おかえりー」

ダイキ（何時の間にか来た）「やっとか。てこずったのか？」

大智「ビーストが出て来やがって…大体そんなもんだ」

ダイキ「…倒せなかったみたいだな？サイラも、ビーストも」

大智「うるさい」

ダイキ「まあ、とりあえず、これでも食べる、疲れただろ」

海斗「ゴチです!」

ツバサ「いえーい」

エリカ「…食べてもあなた、味覚無いじゃない…」

ツバサ「それはいわない約束!」

—————

と言うワケで、皆でワイワイかこってティータイム。

海斗「社長だったら恨みも相当あるんだろうな……」

大智「でも、なかなか海斗の提案、いいと思う。…よし、ちょうどいい、サイラの話しようか」

麻衣「エリカさんから人間の負の感情とかと記憶が交わって出来るって聞いたけど……」

大智「うむ……」

すると大智はカードケースから何枚かカードを取り出した。

大智「これが、ベストカード。ここには『1番』の記憶のレジエンドが封印されている。これはベストアタックカード。ベストレジエンドの力が封印されている。これはリーフカード。『森林』の記憶のレジエンドが。こういうふうにそのレジエンド本体が封印されているのが変身出来るカード。そのレジエンドの力や技、効果が使えるのがまた別のカードとなってる。ま、こいつらは俺が実戦で使う」

海斗「…俺たち関係無いのかよ！」

大智「海斗は一応知ってた方がイイかもしれん……」

海斗「…？」

麻衣「で、こっちは？」

大智「もともとサイラみたいなレジエンド達よりもっと個別に分けられた記憶。メモリーだ。例えばこのタカが描かれたのはタカのメモリー。こっちはアカウミガメのメモリー……みたいにな」

海斗「…じゃあ、こいつらはサイラを作るくらいしか利用法が……」

大智「サイラにするのはカオスだけだ…まず、陰陽の血を持つ者はメモリーを式神として利用出来る」

……

麻衣「……………大智は？」

大智「使える…というか陰陽師、高 祥明…平安時代の仮面ライ  
ダーBESTの子孫だ」

……

海麻「…」 啞然

ツバサ「絶叫は無いんですか？」 笑ながら

大智「信じられないのも分かるんだが…残念ながら本当なんだ」

麻衣「…だからBESTに変身出来るの？」

大智「多分な」

ならこれから大智は記憶の数だけ戦うことに…？大智だけが…？

麻衣「…私も…私も大智を手伝いたい…」

大智「…え？」

麻衣「…私も、大智を手伝いたいの…！」

第十話 未確認生命体（前書き）

大智「あらすじ…ま、会話シーン。以上」

海斗「いやいや、そうだけどさ！？もうちよっとな面白おかしく…」

大智「はい、スタート」

海斗「きけよ！！」



## 第十話 未確認生命体

### 大智の目

麻衣「…私も…私も大智を手伝いたい…」

大智「…え？」

麻衣「…私も、大智を手伝いたいの!!」

麻衣…

大智「気持ちは嬉しいが…ムリだ。出来れば海斗も止めて欲しいくらいなんだ」

そう、ヤツらと戦うにはそれ相應の用意がある…しかし、今あるバトルスーツはG5のみ…しかもG5は使用者がかなり限られる…その現状で…戦いの場にはムリだ。

麻衣「…お手伝いはなにも、実戦力だけ…って事じゃ無いでしょ？」

大智「…え？」

麻衣「だから、その式神…私も使えるかも」

大智「…え？」

麻衣「私、おばあちゃんから聞いた事あるんだけど、私の直系先祖は佐々 憲久って言う陰陽師だったらしいし…」

大智「佐々…」

ツバサ「あ、高 祥明の弟子が佐々だったはずですよ…」

大智「…まさか…」

俺は数枚のカードをだす。先代のBESTが封印したと思われる記

憶が入っている。

大智「これを…」

そう言おうとした時だ。

突然警報がなった。

エリカ「報告します！場所は…AZMホールディングスのビル付近  
！」

ツバサ「AZMホールディングスといえば…あの社長の…！」

大智「確実に狙って来たか…」

そっぴいなからバイクにのる。

大智「麻衣、ほらっ！」

そっぴいつてヘルメットを渡す

麻衣「…もしかして…」

大智「使えるかはわからないが、試す価値はある！ただし、ツバサ  
の後ろで隠れておくこと！」

麻衣「うん！」

三台のバイクと四人がLABから飛びだした

~~~~~

女性「きゃあああああ…！」

狼サイラ「東はどこだ？東は！」

誰かが押したのか…消防の火災ベルが鳴り響くビル内部では混乱が

起きサイラは片っ端から人という人を捕まえては問いほり投げを繰り返していた。

――

## 原の目

警察官「原警部！未確認生命体第58号は現在ビル内部にいる模様です！」

原 啓介「至急SATに連絡せよ！」

警察官「ハッ！」

1年前から現れた未確認生命体：

我々警察はヤツらの前に何度も苦汁を飲まされている。

その為出来たのが未確認生命体対策班：俺がここにいるのもその対策班に属しているからだ。

しかし、ヤツらは暴れるだけ暴れて忽然といなくなるケースもある：そいつらは何処にいるのか：全くわからない

あと気になるのはこいつらがでると必ず首を突っ込んでくる若者だ。ヤツが何か知っているのか…？

警察官「…ぶ！警部！」

原「どうした！？」

警察官「58号がビルから出て来ました！」

原「チッ！！SATは！？」

警察官「現在急行中とのことですよ！」

原「仕方ない、我らでやるぞ…！」

警察官「警部！未確認生命体第7号が現れました！その後ろではまたなんらかの機械が！」

原「またか!？」

未確認生命体第7号……未確認生命体が現れてほどなくしてから現れた他の未確認生命体とは異なるような生命体だ。その背後にはいつも何らかの機械……そう、例えるならロボットの様なヤツがいる。こいつらは何故か発生した未確認生命体と戦う……同士討ちかなにか？

警察官「報告します、謎の機械の背後に2人の男女が!」

原「ヤツ(=いつも首を突っ込んでくる若者)か!？」

警察官「違います!」

原「一体なんなんだ……!?とりあえず未確認生命体第58号を倒せ!7号は近づいてきたら撃て!くれぐれも人間にあてるな!」

警察官「ハッ!」

――

麻衣の目

バイクを走らせている途中大智は変身した。そして一枚のカードをくれた。白いキツネ?が描かれたカード、オレンジ色の淵があるカードだった。

BEST「警察が多いな……これじゃまともに交戦出来ない……」

G5(ツバサ)「とりあえずサイラを射撃しますか?」

BEST「さて、ツバサは現状待機」

G5「:分かりました守りを優先ですね」

ツバサはベルトに着いている0~9までの数字が書かれたボタンの内、055を押した。するとプラズマが現れ中から大きな盾が出てきた。G-05

BEST「とりあえずサイラを釣る…あ、麻衣はさつきも言ったとおりいざとなったら念を籠めて渡したカードをなげろ、海斗は…警察にお前の発砲を見られたら捕まるから、隙を見てそこに尻餅着いてる人を安全な場所へたのむ…」

麻衣「うっうん」

海斗「了解した！」

BEST「うん…ツバサ…くれぐれもこいつらを…頼んだぞ」

そう言うと仮面ライダーBESTはサイラに向かって走って行った。

タン、タン、タンとリズムが刻まれていく…

ダダダダッ！！！

銃声が響く

…警察はサイラもろとも大智に発砲していた…

第十話 未確認生命体（後書き）

新キャラ・原 啓介。野郎ですみません。

警察サイドはこの原のほか何人かいますが…

正直名前や性別も決めていない人が多いのでまた公開には時間がかかります。

十一枚目　　L E A F　　〈森林の記憶〉（前書き）

海斗「狼サイラ編最終話！いやあ…長かった…」

ツバサ「あと、前回は新キャラも出ましたよ！」

エリカ「新キャラ原警部…警察も事態を重く見ているみたいね…」

麻依「そして今回は…BESTの新フォームが!!！」

ダイキ「…あらずじを言わないか、みんな？…まあ、俺が言つと、麻依や海斗をツバサに託してサイラに向って走って行く大智。しかし、待ち受けていたのは…警察隊の銃撃だった…」

大智「BEST…つまり1番！俺は…一番となる者だ！」

十一枚目      L E A F    〈森林の記憶〉

大智の目

ダダーン…

BEST「グッー!!」

体に痛みが走り、怯む。

左肩、左胸、右腕、右足…確実に着弾した。

BESTのスーツはそんなにやわじゃない…だが、警察隊が使っている銃はこれまでの対サイラのためか通常の装備を遥かに超える装備だ…

…狙いが少々ぶれても、弾丸一発で人間が軽く吹っ飛ぶくらいの銃。いくらBESTのスーツが強硬であっても衝撃はやはり強い…

BEST「くっ…仕方ない…か」

俺は一枚のカードを取り出した。

『LEAF』と書かれた緑色のカード…

俺はそれをバツクルにスラッシュした。

L E A F    C a r d

BEST「変身！」

そう言うが早くバツクルを斜めに倒す。



Change!

すると緑色のプラズマのようなエネルギーと地中から突き上げる様に生えてきた根が俺の体を包む。

BESTLF「はあっ!！」

そう叫びながら右腕を刀の如く横に振り宙を切る。するとプラズマと根が弾け飛ぶ。しかし、その姿は今までの漆黒のスタイリッシュなBESTフォームでない。緑を基調とし所々銀のラインが入った色合い…そのフォルムは鎧を被ったかの様なスーツ。【森林の記憶】をもつリーフフォームだ。

姿が変わり…というか恐らく根が飛んできて慌てた警察隊もまた銃撃を開始し始めた。

しかし先程怯ませられた銃撃もこのスーツの前に全て無能力同然となる。

リーフフォームの大きな特徴、それはスピードを犠牲に防御力を上げること。

そして…右手に今握っている『フォレッツサーソード』という大剣。

だが今はこいつを使う時じゃない。

俺は大音声でサイラに言った。

BESTLF「東がいるこっちには絶対行かさん!！」

それを聞いた警察隊は皆首を傾げる。

…つまり恐らく東社長はこのビルの上か警察が保護したのだろう。  
つまりハツタリだ。

現場はいっぺんに静まりかえる…ただし、嬉々とし始めたサイラを除いて。

狼サイラ「なんだと？」

獣の記憶に属するサイラ達の共通点。  
それは、身体能力が高いということと…

狼サイラ「東を殺す！」

アホであること。

予想通りこちらに走ってきた。  
俺はすぐさまバイクに跨り逃げる。

BESTLE「ついてこれるもんならついて来い！」  
狼サイラ「ノロマめ！待てえ！」

バイクで走りながら不安そうにみる麻依と海斗を見た。そして少し  
頷いてからバイクを飛ばした。

――

狼サイラ「…ここか…」

渚沙市の真ん中を流れる千渡川。

ここはその河川敷だ。

バイクを追ってきたウルフサイラは臭いがここで終わっているのを感じ、東を探していた。

彼らは“目的”を果たさなければ自由に殺戮が出来ない。何故かは恐らくカオス達が超古代、レジェンドとして人間に使われていた名残であろう。

狼サイラ「ふん、お遊びも、そこまで…だな！」

ウルフサイラが飛びかかろうとした瞬間、

BESTLF「はっ！」

BESTが剣で突いてきた。

不意の攻撃で怯み倒れるウルフサイラ。BESTはカードをスラッシュしバツクルをいつもとは逆方向の斜めに倒す。

LEAF Final Attack Card Charge

！

――

大智の目

!

俺は剣を縦に持ち身構える 3 緑のプラズマが俺と 2 剣を包み、【森林の力】を与える 1

パワーチャージカウントが終了したと同時に俺はバツクルを一気にいつもの方向に倒しながら言い放った。

BESTLF「リーフクロスフォース!!!」

GO!!!

フォレッツサーソードを地面に突き刺す。すると地面にヒビが入り一直線にサイラの方へ行っただかと思うと根が天を割く様に生えてサイラを完全に掴む。

狼サイラ「何!?!」

ジタバタするサイラを睨みつけながらフォレッツサーソードを抜き体の横に構える。そして地面を滑りながら横一文字に斬り滑り抜ける。

BESTLF「はっ!!!」

体を捻ってサイラの方を改めて向きながら飛び上がる。そして…

BESTLF「おりやああああああああ!!!」

狼サイラ「うがああああああああ!!!」

横一文字に斬る。

リーフフォームの必殺技、『リーフクロスフォース』だ。

爆発したと同時に無印のカードを投げる。

前も言ったかもしれないがこうしなければ時間とともに記憶が消滅してしまう。

記憶が消滅した種族の生物はある程度繁殖しているものなら数年、そうでなければ場合によったら十日ほどで絶滅となる。

… 勿論記憶が残っているのに絶滅してしまった生物もいるのだが、記憶が残っている生物は絶滅後も語られる。だが、記憶が消滅すればごく僅かな文献にすこし書かれているのが残るか否か…のみだ。

…と、そうこうしている間にカードが返ってきた。オレンジ色のカードだ。

大智「封印完了…っ」と

辺りを軽く見渡してから俺はバイクに跨った。真紅の鳥が青空に… 羽いる。俺はその青空を背にバイクを走らせた。

――  
麻依の目

海斗「… 何、あの姿… フォームチェンジか!!」

私達はあのあとツバサとともに逃げて研究所に戻っていた。

… 海斗はご覧の通り嬉々としている。

だけど、私はとてもじゃ無いけどそんな気分にはなれなかった…

?? 『キユイ、キユイ!』

麻依「あ、お帰り!」

私はそういいながら目の前の真つ赤なスズメに目を向ける。

…実はこの子、研究所に保管されていたスズメのカードのメモリーを実体化した式神。本当に私は使えたみたい。

スズメ『ダイチ、サイラオシタ!』

麻依「ほんと!?!」

スズメ『今カエツテキテル!』

え?どうしてスズメが喋るかって?

私にはよくわか…

ツバサ「そんな時は僕に聞いて下さい!」

麻依「キャツ!?!え?何ですか?」

ツバサ「いや、なんか相談的なもの聞こえたので…」

麻依「なんでも無いです…」

ツバサ「そうですか?」 トボトボ

…なんで分かったんだろう…

でも、よく考えたらサイラも喋ってたし…だからなんか知らないけど喋れるんじゃないかな?

大智「ただいま…勝ったぜ!」

全「おかえりー!お疲れ、やったー!」「」

私はとびっきりの笑顔で出迎えた。

第十二話 『MRC』（前書き）

士「さて、あらずじ始めるか」

大智「なんでお前が!？」

ユウスケ「かーなーり時間をかけて狼サイラを倒した大智達」

夏海「今回はその一週間後の話です!」

海東「なにやら海斗くんがやってるみたいだね…にしてもこのG5

はお宝だ…あと…このデータも…何々?『プロジェクト・ソー…』」

エリカ「それは極秘です!」

大智「BEST…つまり1番…俺は、1番となる者だ!」



## 第十二話 『MRC』

麻依の目

あの事件以来、私と海斗はほとんど毎日研究所に行った。  
そして、今日も。

だけど大智がいなかったからエリカやツバサと談笑していた。

麻依「それでー」

エリカ「うんうん！」

海斗「クククツ」

ツバサ「ハハハハツ」

大智「ただいまっ」と

麻エリ「おかえりー」

海斗「なにしに行つてたの？」

大智「いや、ちよつとメシの買いだ…」

大智の表情が曇る。

大智の目はただ一点を見ていた…そして

大智「なんじゃありやあああああああ！！？？」

――

私と海斗とツバサとエリカとついでにダイキが正座させられていた。

大智「…誰が貼ったんや？あれ」

とりあえず全員、主犯の名前をだす

麻ツエダ「…海斗」

海斗「ちよつと待って！？ツバサも一緒に貼ったじゃん！？」

大智「そうか…で、あれはなんや、あれは？」

大智が「あれ」を指す。

そこには、大きく『MRC』、その下に『TAKAMILAB』、そして中央に仮面ライダーBESTを表す『B』の文字が刻まれた旗だった…

大智「あれはなんや？」

海斗「『仮面ライダー部』の旗です…」

大智「『仮面ライダー部』？」

海斗「うん…今放送されてる仮面ライダーに…そんなのがあったから…んで…俺たち、部活やってないだろ？だから…」

大智「部活じゃねえだろ、まず学校外だし」

海斗「そっそっただけど…」

大智「ま…とりあえず…」

大智は大きく息を吸い…そしてため息と共に

大智「いいんじゃないか？『仮面ライダー部』」

海斗「え！？いいのか!？」

大智「但し!…海斗、歯ア食いしばれ…」

海斗「…え？」

ゴツン!!

海斗「ツテエ…ヒデエ…」

大智「ヒドくない!…それと、旗の場所…邪魔だからを変えるのと、名称を『仮面ライダーサークル』にすること。部活じゃねえし、場合によつたら政府から金が貰えるんだ、部活にも出来無い」

麻依「それじゃ…」

大智「…俺は会員No.6…だな？」

全「…やったあああああ!!」「」

海斗「あと大智はNo.1だよ!仮面ライダーがいなきゃ仮面ライダーサークルじゃないし!!」

大智「ははは…分かったわかった…ダイキ、コーヒーくれ」

ダイキ「ああ、分かった」

大智「…やれやれ」

――

ピンポン

何気ないチャイム、だけどわたしと海斗以外の全員が動きを止めた。

エリカ「はい」

エリカが走っていく…その顔にさっきの笑みは無かった…

大智も顔を真顔にして、机を軽く片付けている。

エリカ「どうぞ…」

男「すまないな…エリカ」

大智「お久しぶりです、西村さん」

男「おお、久しぶりだな…大智」

エリカと一緒に一人の男…西村と言う人が入ってきた。

大智「…」

西村「私が来たらすぐに顔をそんな風にするな…まあ、無理もない…おや？彼らは？」

大智「ああ、俺の友達です」

海斗「一之瀬海斗です」

麻依「佐原…麻依です」

西村「なるほど、私は内閣情報調査室特殊科の…西村にしむら 誠まことだ」

え…もしかして…

麻依「内閣情報調査室!？」

西村「…ん?知ってるのか？」

麻依「はい…エリカから以前…」

西村「…我々を知っているから大層政治に興味があるのかと思った

が…なるほどな」

海斗「ないかくじょーほーちよーさしつ？」

西村さんは笑顔を絶やさず説明してくれた

西村「内閣情報調査室とは、名前の通り内閣の下で日本のありとあらゆることを調査するところだ。そして、私が所属する特殊科とは現代科学で解明出来無い事柄を扱っているんだ…あ、現代科学で解明出来無い事柄っていうと例えば…そうだな…お化けとかならわかりやすいかな？」

海斗「じゃあ、ここになんで？」

西村「我々の手におえない事件が起こったからだよ。警察は動けないし、僕達は止めることが出来無い。だけどBESTの力を使えば解明できる事件を依頼しに来たんだ」

麻依「じゃあ警察とは…」

西村「全く関係ない組織だね。…でもまあ、こうして私も拳銃を所持してるから間違われても仕方ない…かな？」

そういうと西村さんはおもむろに懐に手を入れ黒い塊を見せた。「「ULTIM1900」まあ、ホントにサイラが出てきたらこれでは対応不可だけどね」と笑みを見せつつもう一度しまう。

麻依「…よく考えたら…G5の装備品…あれ銃じゃ無い？」

西村「ああ、あれは特例許可を政府からもらって…ね」

大智「とーさんが作った。全く…どこでこんな物騒なものの作り方を知ったのやら…」

大智は頭を掻きながらボヤク…

西村さんも私もははは…と笑う事しか出来なかった。

西村「尤も、警察の方も対策本部を渚沙市において居るみたいだけど、それでもBESTの事を知ってるのはほとんどいないんじゃないかな？」

海斗「だから大智を発砲したのか…」

西村「え！？撃たれたの!？」

大智「ええ…まあ、変身後ですが…」

西村「良かったあ…いや、良くないか…あ、まあ、説明はこのくらいで…」

西村さんの顔から笑みが消えた。

西村「本題に移ろうか」

――

大智「はい、事件とは？」

西村「うん…今回は今までに無いケースだ。最近、この渚沙市で毎日一人、不可解な自殺を遂げている」

海斗「自殺？自殺に不可解ってあるんですか？」

麻依「…海斗、話は最後まで聞こうよ？」

西村「…で、なんで不可解かと言うと、最初の自殺者は、当日やつと2年越しの想いが彼に届いて付き合い始めたそうさ。二人目はなんとガンを克服してその日退院したそうなんだ」

ツバサ「確かに不可解ですね…イジメなどは無かったのですね？」

西村「そう、それどころか皆生きる希望に満ち溢れていたそうさ。自殺するような状況でもそんな性格でも無かったそうさ…そしてなに

より、自殺する瞬間を目撃している人が必ずいて、皆口々に『なにか異様なモノが自殺者の後ろにいたけど、その人が死んだ後何時の間にか消えていた』と語っている。最も、彼ら全員精神異常と診断されているのだが……」

大智「なるほど……確かにサイラの可能性がありますね……」

西村「そうなんだ……ところで君たちは危険だから帰った方が……」

海斗「大丈夫です！」

麻依「……たぶん……」

西村「そうかい……？まあ……」

テレビ「たった今入りました情報によりますと……」

ダイキ「おい！みんな！」

大智「何々……」

テレビ「……調べによりますと死体の身元は渚沙市に住む会社員平松宏人さん二十八歳で……警察は自殺とみて捜査を……」

全「……」

全員黙り込む……

少しの間した後、不意に大智が口を開いた。

大智「……エリカ、出来るか？」

エリカ「やってみます」

もちろんこの人が最近どういう状況におかれていたか……だ。

エリカ「ダメです、掛かりません」

大智「まあ、そうだろうな……」

ツバサ「じゃあ僕、聞き込みに行きます」

海斗「俺も」

西村「ちょ、ちょっと!?まだこの事件との関連が決まったわけじゃ……」

大智「結論をまっていたら時間が掛かります、なら間違ってもいい、情報を集めなくては……」

西村「んー…じゃあ、私は以前の不審自殺についてもう一度リサーチするよ」

大智「ありがとうございます」

西村「依頼元が協力しないわけないよ…パソコン借りるね」

みんなまた慌ただしく動く…

海斗とツバサはもう研究所を後にした…

大智もエリカもダイキも西村さんもパソコンやらテレビやらで情報を集める

だけど……

麻依「…また…だ…」

――

### 大智の目

海斗達のお陰で彼は新たな事業が成功して今から頑張っで行こうと希望に満ちていたようだ。

西村「不審自殺…か」

麻依「そういえば、サイレンが鳴らないからサイラじゃ無いんじゃないかな…」

大智「…果たして…そうかな…昆虫の記憶…イノセントカオスが使うサイラはこのサイレンに反応しないヤツがいる…厄介だな」



イノセントカオス…昆虫の記憶

こいつが作るサイラは多種多様だ…それゆえ最も注意が必要となる

西村「それにしても…高見博士は凄いね…感心するよ…」

大智「…」

西村「何もかも独学なのに御存命ならノーベル賞を取ってしまうくらい偉大な方だった…」

大智「…越えられない壁…」

麻依「…え？」

大智「ふふっ…なんでもない」

越えられない…いくらもがいても…

科学者として…人として…

海斗「あとは…明日誰の前に現れるか…だな」

ダイキ「あ、ちよつといいか？」

大智「どうした？」

ダイキ「これを…」

そういうとダイキは机に渚沙市の地図を広げた。

ダイキ「これまでの不審自殺を地図にまとめた…一件目がここ…二件目…三件目…」

次々に印がついていく…

ダイキ「そして、今日は…ここ」

最後の印が付いた…これは…

大智「…七芒星…」

麻海「…?」「」

大智「五芒星や六芒星とならび評される図形だ…その意味は…『光』  
…」

ダイキ「そう…そして…最後の点を入れるとしたら…ここだ」

ダイキは予測地点に丸をつける。

西村「…絞れたのはいいが…何のために…?」

大智「…分からないですね…ただし、これで場所は絞れた…あとは  
幸せそうな人を捜して…」

麻依「…いや作ったらいいんじゃないかな?」

全「…?」「」

エリカ「どうやって?」

麻依「良くあるじゃん?こっ…」

……翌日……

リゴーン リゴーン リゴーン

おめでとー!

おめでとー!

おめでとー!

その日、渚沙市北西部の教会では結婚式が執り行われていた。  
惨劇を呼ぶかの様に…

そして…惨劇を始めようと異形の者と一人の男がその様子を見てい

た。

「……ほう……こんなところでな……」

「……これで……これで僕は……」

「……ふふふ……ならばアレで最後とするか……」

異形の者はその姿を陰に隠した。

最後の仕事の後訪れる惨劇を思い浮かべながら……

第十三話

WATER 水流の記憶 x 失い、現れた光（前書き）

大智「…正直、あらすじめんどくせえ…」

士「そう言うな、大智」

大智「…これを見てそう言えるのか…？」

弦太郎「あらすじキターー！！」

ユウキ「こつちの世界では『マスクドライダーサークル』が発足したみたいね！」

賢吾「…いや、俺は認めない…『仮面ライダー部』も『マスクドライダーサークル』も…！！」

大智「…いや、あらすじしろよ…orz」

士「何と言うか…どんまい」

あらすじ省きます「省くのかよ！？by大智」

大智「BEST…つまり一番…俺が一番となる者だ！！」

### 第十三話

WATER 水流の記憶 × 失い、現れた光

――渚結婚式場――

??? 「あー疲れたつと」

花嫁姿の人はふうとため息を付きつつ控え室の椅子に一人でくつろいでいた…と、疲れからか寝てしまったようだ。

当然、この部屋にいた招かれざる客の存在など気づく筈も無い。それもそうだ。部屋に入った時には何者も見えない筈なのだから。

??? 「くくくつ…まさか今から死ぬことになるとは思っまい…」

異形の者が少し姿を表しつつ右手首に狙いを定める。その手にはナイフがしっかりと握られていた。

??? 「くくくく…死ね！」

異形の者はナイフを振りかぶる。そして…

??? 「ぐはっ…！」

強烈な肘鉄が異形の者…モースサイラの腹に入る。  
その反動で今まで完全には見えなかったその姿が明らかとなる。

――高見研究所――

P i P i P i P i P i P i …

エリカ「大智？女性控え室から反応が！！…うん！！…うん！！…分か  
った！」

ツバサ「ダイキ！女性控え室の方だ！！すぐに…ああ！！頼んだ！」  
麻依「海斗…頑張つて…」

――渚結婚式場――

???「はあっ！！！」

蛾サイラ「グフツ！」

ストレートパンチがサイラに入る…そうするうちに花嫁の衣装がと  
れていく…

???「おりゃああああ！！！」

蛾サイラ「うぐうう！？」

これで最後と言わんばかりに投げられ、モースサイラは怯む。

しかしこの程度で大ダメージを受けるほどヤワではない。

すぐに起き上がってみると…

海斗「…クソ！きかねえか…」

一之瀬海斗がいた。

蛾サイラ「な！？何！？男なのか！？女なのか！？」

海斗「はんっ！策士策に溺れる…ってかぁ？お前の行動は単調過ぎた！」

――

全「方法？」

麻衣「はい！海斗！人生で一番幸せな瞬間って？」

海斗「え！？ええ！？」

ツバサ「ここはベタに結婚…とかじゃ無いですか？」

麻衣「そう！そして、この予測地点には…すぐ近くに結婚式場があるよね！なら…ここで模擬結婚式をやって呼び寄せて……一気に叩く！！って言うのは？」

ダイキ「しかし…そんなに簡単に上手くいくか？」

大智「ああ…外れたら…」

西村「大智くん、やらずに後悔するよりやって後悔した方がいいですよ！？それに予測地点は近く。もし失敗してもチャンスはあるよ！」

大智「しっしかし…」

海斗「大智！やろうぜ！！」

麻衣「大智！！お願い！！」

大智「…」

――

蛾サイラ「クソッ！！」

モースサイラは飛びかかり海斗を殺そうとする…が

海斗「甘い！殺気が出すぎだ！！」

そう叫びながら相手の攻撃を右に左に受け流し敵の気の波長に合わせる。

大きく振りかぶった右拳がくるのを確認するとまるで水の如く流し、さらに自身の気を使って投げ飛ばす。

海斗「これぞ、海野流合気道術、伍の型！竜仙！！」

海野流合気道の技を最大限に生かし発展させた海斗の投げに流石のモースサイラも少しダメージが残る。

海斗「お前が人間なら…とつくに意識失ってるぜ？」

蛾サイラ「ぐっ…」

大智「海斗！！」

海斗「お！遅いぜ大智…」

大智「すまんすまん！」

海斗「な？引つかかっただろ？」

ダイキ「まさか…な…」

大智「…しかし…お前…女装似合いすぎる…」

海斗「だつ大智！無駄口叩かずに早くたおせ！！」

大智「ああ…それより…やはりイノセントのサイラか…！！」

蛾サイラ「もしやお主は…？」

大智「フツ…一番となる者…BESTだ！！変身！！」

BEST Card Change！

ダイキ「変身…」

P i P i P i Enter G 5！

――

先程のダメージを大体回復したモースサイラは結婚式場を飛び出した。それにBEST、G5も続く。



蛾サイラ「まさかお主らがいたとはな…だが…俺は目的を果たさねばならぬ…邪魔者は失せよ!!」

BEST「それは無理な相談だな…お前らが人を殺さないなら…考えてもいいが？」

蛾サイラ「…ふんっ…それこそムリだな…はあああっ!!」

モースサイラがBESTに向けて飛びかかる。しかしサイラの拳が出るより先にG5が殴る。G5の重い装備通りの一撃が次々にサイラに浴びせられる。

G5「ハッ、ハアッ！」

蛾サイラ「ぐはっ!？」

海斗「大智!!大丈夫!？」

ようやくここで海斗が追いついた。

BEST「おっと、海斗!？危ないぞ!？」

海斗「大丈夫、シヨット借りてるから」

それで大丈夫な保証は無いぞ…大智はそう思いながらカードを取り出す。

BEST「とりあえず…これにしておくか…」

Water Card    Challenge!

すると大智を中心として蒼いプラズマと水のようなものが球状に集まる…そして…

BESTWF「ハアッ!!」

右手でそれを裂く…するとそこにはやはりいつもの姿はない青いベストフォームのフォルムを纏い全体的に流線形のスタイリッシュなウォーターフォームへと変身を遂げていた。

ベストフォームとの違う点は形、色だけでない。その一つが右手に構えているのはリバーマグナム。これにより遠距離射撃を可能とする。

海斗「…すげえ…」

BESTWF「オイオイ見とれずに隠れるなりなんなりしろ」

海斗「あー！もう、分かった！分かった！」  
そうして大智は海斗が少し距離をおくのを見てから射撃をしながらサイラに近づいていった。

一方こちらではモースサイラが息を吹き返し肉弾戦となっていた。  
蛾サイラ「はああああっ！！」

G5「おりやつ！…ああ、動きにくい…！！」

BESTWF「すまん、ダイキ！俺が変わろう」

G5「ああ…頼んだ」

そうするとBESTはサイラに蹴りや銃撃を行いG5は少し距離を置く…

周りを確認したあとダイキはコードを入力する。

P i p i p i

するとG5の装甲の亀裂部分から強烈な光が漏れ出し次々に装甲が浮き上がる。

G5「大智！どいてろよ！」

そう叫ぶが早く決定する。

E n t e r    L o s t G 5 !

L G 5 「ハアッ！！」

その叫びとともに全身から一層強烈な光を発しG5の分厚い装甲の外側が弾け飛ぶ。そのアーマーの直撃によりサイラは吹き飛ばされるが、サイラが気がついた時にはもうそのアーマーは無い。そしてみると光を纏った戦士…仮面ライダーLostG5が姿を表した。

L G 5 「ふう…行くぜ…」

そう言つが早く走り出したかと思うと直ぐにサイラの前に現れ、声が出るより早く殴る、殴る、殴る。

L G 5 「ハアッ！！」

蛾サイラ「グツ!?!」

そう、このL G 5、防御力や攻撃力は落ち更にはG 5では使えていた武器の一部が使用不可となる上バッテリーの消耗が激しいという文字通り“劣化G 5”なのだが、スピードが上がる…オーズのラトラーターに負けを取らないであろうスピードがでる。G 3系統システム最大の敵、スピードに特化した形態なのだ。

L G 5「ハアアアアアアアアアアアアツ!!!」

その間にも無数の蹴りが入る。さらにL G 5の少しの間にはB E S T がリバーマグナムで銃撃しモースサイラにダメージが入る。このままだと倒すのも時間の問題だ。

その時、

??「止めてくれ!!!!!!」

男性が叫びをあげた。

### 第十三話

WATER 水流の記憶 × 失い、現れた光（後書き）

今回は珍しく後書きを書こう。

海斗が女装適合www

これはド耐で生かせますね！

できればは…麻依がシヨック受けるくらいです

海斗の特技、合気道キターーーー！！

陰陽師 気功 合気道って感じでこの設定

海斗の海野流合気道術ですが…自分合気道習った事も見た事も無いので（マンガの主人公がやってたのを読んだくらい）ご教授頂ければ幸いです。

柔道はやってたのですが それでも弱小でございます。

大智がウォーターフォームに、ダイキがLost G5に…！

BESTのフォームチェンジが増えましたね！

まだまだですよー、いつになるかは知らないですが

G5のこのフォームチェンジと言うかなんとやらは実は全く構想にありませんでした。ダイキにG5着せたら重いというかなあと思っ  
て急遽作りました。

ちなみこの時海斗はちゃっかり着替えてる設定です。

G5のファイズの要素には目をつむって下さい。

はい、なんか最後に男が出ましたー。

次回でコイツがちょっとやらかします

どうぞ乞うご期待！！…しないで下さいね！！…！！

第十四話 幸せ（前書き）

これまでの仮面ライダーBESTは…

西村「私は内閣情報調査室特殊科の…西村にしむら 誠まことだ」

麻依「…また…だ…」

蛾サイラ「くくくつ…まさか今から死ぬことになるとは思っまい…」

海斗「…クソ！きかねえか…」

大智「フツ…一番となる者…BESTだ！！変身！！」

LG5「ハアアアアアアアアアアアツ！！」

全ての…一番と、なれ！！

大智「…つまり宣言通りのあらすじをしようとしたけどあんまりいい会話シーン無かつたんだな？」

明日無「…申し訳ない…」

大智「今回からいっつも俺が担当していた前振りを交代でします。今回は前回サイラを暴いた海斗！」

海斗「MRC…俺たちがこの街を守る！！」

( 今回から一部表記を変更します、ご了承ください )

## 第十四話 幸せ

「止めてくれ！！！！！」

大音声で叫ぶ声…声質は男性のものようだ。

やめる必要などない、そう思いながらも大智は不覚にも一瞬男性の方を見てしまった。30代後半と思われる男性…大智はハッと気がつきサイラの方を見ようとすると…

しかし、その間は、今までの優勢を大きく変えてしまった…

「ウツ…グアガアッ!?!」

「なっ…!?!」

仮面の下からダイキの声が漏れでる…力無く倒れて行くLost G<sup>ガラ</sup>5の装甲…それをスローモーションの如きスピードで見ながらサイラを探す…

しかし…いない。

「大智！！」

「ハッ！！」

「なっ！？」

海斗が叫びで大智はなんとか攻撃の直撃を免れた…どうやら空を飛んで攻撃のチャンスを伺っていたようだ。すぐさま大智はリバーマグナムでヤツを撃つ。

しかし…

「待てッ！！」

「グッ！！」

「やっ止める！！止めてくれ！！」

先程見た男が大智とサイラの間割って入って来た…改めて見ると20代中ばのようだ…しかしその顔は老け活気も無く…言葉が悪いが俗に言う“陰キャ”だと大智は思った。そして男はとて小さな声で話し始めた。

「やめてくれ…頼むから…」

「おっオイ！お前！そいつが何なのか分かってるのか！？」

「ああ…こいつは俺の願いを叶えてくれる…」

「ばっバカ言うな！！ヤツは人を殺す怪人だぞ！？」

大智は叫んだ。いや、吠えたと言ってもいいだろう。そのくらい大智は叫んだ。

だが、



次の瞬間、彼は変貌した。

「ククツ…クククククク…ハハ…ハ…ハツハハハ！！」

「何がおかしいんだ！？ヤツは…ヤツは！！」

「煩い煩い！！…あと一人だア…あと一人…目障りな人間を消せばア…俺はア…俺はなア…永遠にイ…幸せに…ククククツ…ハハハ…ハハハハハハハ！！」

「なつなに…？人間を…消す？」

「そーだ！人…それも幸福であれば幸福な程いい…その屍を一日ずつ増やしていつて七芒星を作れば…ハハハハハハハ！！俺は…俺は！！…ハハハ！幸せになれんだよオ！！…これでエ…今までの散々な人生に…おさらばつつつつーワケだ！！ハ…ハツハハハ！！」

「くつ…狂つてやがる…」  
「人が人を殺すなんて…どう言う事か分かってんのか！？」  
海斗も耐えきれずに叫ぶ。

「なーに言つてんだよオ…お前はバカか！！俺を…俺の存在を殺しやがったのは他でもねえお前ら人間だ！！社会だ！！この世の中だ！！…人を殺しちやダメだア…？人の存在を否定するのは殺人じやねえのかよ！？…ハハハ…ハハハハハハハ…ハ…ハツハハハ！！わからねえよな…わからねえよなア！？お前ら“人間サマ”にはよオ！！…ハ…ハツハハハ！！…幸福云々はどうでもいい…あいつらを…殺せ！！」

「…了解だ」

男の叫びでサイラは飛びかかってくる。それをリバーマグナムと少し距離を開けてG・O1ショットで迎撃する…

しかしヤツは羽を展開…そして鱗粉のようなモノを出す…

「ハアッ!!」

「なっ…グアアアアッ!?!」

その攻撃にBESTWFは痺れ力無く重力に従う。ドサッ…地面に屈する音が響く…

「クククッ…さて…」

モースサイラはBESTWFに歩み寄る…

しかし、通り過ぎる。

「だっ大智!!」

「…ここら…お前はお前の命の心配をしなきゃ…こいつなんか構つてる暇ないだ…ろ!」

「…クッ…クソッ!」

モースサイラはすぐ真下で転がっていたLostG5を蹴飛ばし尚も海斗の方へ向かってくる。

海斗はショットで撃ちながら逃げる。しかしモースサイラは羽を展開して守り少し怯む程度でダメージは薄い。

海斗はクソと呟きながら走る、走る、走る。

「ハッハッハッ…」

「クククッ…弱い…弱い…」

――

逃げる、追う、逃げる、追う、逃げる、追う、

しかしそれが永遠に続くワケも無く、海斗はついに行き止まりに立ち往生してしまった。

「なっ…ハッ!？」

「愚かだ…本当に…」

海斗はもはや言葉もでないくらい息が上がっている…頼りのG・O  
1 ショットは既に玉切れだ…

「ツツツ!」

「さて…最後の言葉はそれでいいかな？」

…海斗の頭には今までの思い出がぐるぐる流れる…死ぬ前に記憶がフラッシュバックすると言っつのは本当の事だったんだ…海斗はそう思いながら、ただ、最後の時を待つ…

「ふふふ…これで…終いだ…」

モースサイラは笑いを堪えながら右手を振り上げる…そして…

ダンッダンッダンッ…

三発の銃声が響いた…

サイラは怯み動きを停止する…  
そして後ろをみる…  
そこには…

「ガアッ…まさか…!？」

「ああ…そのまさか…だ」

傷まみれのLostG5がいた。

「ダイキ!？」

「…クソ、通信システム及び各部のアーマーが故障か…」  
「ダイキ!大丈夫!？」

「…微妙…<sup>コイツ</sup>LostG5があとどれほど言う事を聴いてくれるか…  
だな」

見ると左肩、左腹から配線や機械が露出し、左目に光は無く左腕自体だらしなく垂れていた。左の角も無残にも抉れ無くなっているが右手にはその姿には不釣り合いな大型の銃があった。

LG5は満身創痕の体でコードをなんとか入力し決定する。

P i P i P i    E n t e r    E N D C o d e

「よくも…邪魔しやがったな…」

モースサイラは怒りのままにヤツに飛びかかり襲いかかってくる…  
それが大きな“隙”となった。

ダイキは攻撃を受ける1秒前、右手で引き金を引いた。すると大きく強力なレーザー弾が一闪、モースサイラを貫いた。

「ハアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

「ガアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

モースサイラは爆散する…

…がLG5も後ろに吹き飛び倒れる。

それと同時に至る所から機械の部品が地面に落ちる。

先程の攻撃はやはりLG5には重すぎたようだ…さらに最大稼働時間も過ぎもはやLostG5はただの鉄くずに等しかった。

急いで海斗はダイキの元に駆け寄る。

「ダイキ!!!」

「か…海斗…ヤツを封じてくれ…俺には…出来ない…」

そついいながらダイキはガラクタの中から右手を差し出す…その手には無印のカードがあった。

海斗は自身の左にダイキを抱えてカードを投げた。

するとそこに浮いていたエネルギー体をカードが吸い込み帰ってくる。戻って来た時には無印だったカードが黄緑色をしていた。

それから間もなくの事であった。

車のエンジン音が海斗達の後ろで停止する、と

「海斗！ダイキ！」

ツバサが運転席から出て来た。

その後はツバサがダイキを車に乗せ海斗が車に乗り込みツバサの運転でTAKAMILABに帰った。

――

後で海斗が聞いた話だがダイキが海斗を助けに向かった後大智は気がつくともBESTWFのままその男に殺されそうになったためリバーマグナムの淵で気絶させツバサに連絡をとりエリカが通報したためその男は御用となったようだ。

そして西村さんの車で大智はTAKAMILABに帰り、ツバサがダイキと海斗を探しに車でいって二人を拾ったそうだ。

さらにダイキが最後に使ったG-04ブラストはLostG5では

本来使用不可のモノで、もし使うと通常の弾でもその威力に耐えきれず装甲はもちろん装着者にダメージとなるようなものだったそう  
だ…

つまりあの時のダイキの行動はかなり無謀な事であつたらしい。もし彼がロボットで無かつたら…命は無かつたであらう。

――

その日の夕方…

「…なるほど…あの男はそんなことを言つてたのか…」

「はい…」

海斗と大智は西村と麻依に今日あつたこと…とくにあの男について話をしていた。

「幸せ…彼に何があつたのでしょうか…」

麻依が西村に問う…

「…分からないね…もし想像できたとしてもそれ以上の事が彼の身にあつたのかもしれない…」

「彼がしたかつたのは…復讐なんでしょうか…」

「…最初はそうだつたんじゃないかな？でも…どんどん彼自身の中で婉曲していつて自己を抑えつけられなくなってしまったんだと思う…幸せになりたい…ってね…フツ…幸せ…か」

「西村さん？」

「幸せつて…何なんだろうね…幸せのカタチなんて何百通り…何千通り…いや、一記憶の数だけ（無数に）あるのに……社会が俺を拒んだ…か…」

大智達には、ただ黙り込むしか出来なかった…

MRCの旗に研究所で一つしかない窓から夕日がさした。

――

…これも海斗が後に聞いた話だ。海斗自身と大智は奇跡的に殆どケガが無かったがLostG5は左パーツ各部分等がやられてしまっていたためダイキとツバサが2日かけて修理を施したそうだ。

最後に…その修理したダイキだが…ダイキ自体も左腕の機械が完全に損傷してしまっていた他、様々なパーツがやられてしまっていたためその夜と次の日疲れが残る大智とツバサが修理した。

そしてその週の水曜日にはTAKAMILABにいつもの活気が戻った。

海の都、渚沙…

太陽は、何事も無かったかの様に、今日も渚沙に朝を告げる。



## 第十四話 幸せ（後書き）

今回も珍しく後書き書いてみます。

さて、西村さんが美味しいとこ泥棒ですねwwww

西村さんは置いておきましてじつはモースサイラ編は四話構成のもりでした…ってかそもそも四話で一つの話をする（仮面ライダーTV版は二話で一つの話ですよ）って思ってたんですよ。理由ですか？作者が一話のアイデアに根を詰めて、結果的にタイムオーバーで、無理やりまとめ公開してたからです。すると自然と一話が薄く、そしてあまり語らなくなってしまうたわけです…はい、すみません。文才無くてすみません。

今回は自分自身の思いをぶちまけてみました。ただ、それじゃ切るポイントを見失った上あんまり膨らまなかった…それで二話分を一話に凝縮したわけです。

ただし、話の深さはいつもの四倍のつもりです…あ、いつもが薄すぎるんですね、すみません。

そして忘れちゃいけないのがあの男。俺自身の思いをぶちまけるために出来たのがあの男です。

…ハイ、自分かなりメンタル弱い上にネガティブです。名前？さあ？

でも社会が自分を追放したって思ったことある人意外と結構いると思うんです。え？俺だけっすかそうですか。

とりあえず、今回は力作です。

おそらく空前絶後これが俺の一番…かも…

次回のネタ思いつかねえ…

復讐と噂と一之瀬海斗（前書き）

大智「あらずじ…なんで毎回こんなにも出来がイマイチなんだ…」

麻依「その前に作者の作品自体グタグタ」

海斗「…多分今頃作者頭にペンやらノートやらがささってキーボードに屈伏してるぞ…麻依の発言で」

エリカ「あらずじお願いします」

モモタロス「おっしや!!」

ウラタロス「僕の出番だね」

キンタロス「泣けるで!!」

リユウタロス「答えは聞いてない!!」

リョウタロウ「…今回はダイキの活躍もあつて蛾のサイラを倒しました、今回は新キャラ注意!よし、終わり」

イマジンズ「…俺（僕）達の出番がツ!?!?!」

大智「前回の意味で今回の振りはダイキだな」

ダイキ「…え?これ何話せばいいんだ?」

全「…それで始めねえよ!?!?!」

でも、始めます。

## 復讐と噂と一之瀬海斗

「オラ！早く金出せよ、金！！」

「お前は金を出すしか能がねえんだから…よ！！」

「グッ」

「オイ、何とか言ったらどうなんだよ！！」

「……………」

「ハハハ！怯えてやがる！！」

「オーイ！財布あつたぞ！」

「よし、じゃあ中身だけ抜いとけ」

「……………」

「オラ、今度も持ってこいよ！？」

「分かってんのか！？」

（ユルサナイ…僕ハ…アイツラヲ…）

――

海之都…渚沙はよくこう例えられる。

山も確かにある…TAKAMILABがある浜音山などだ。

だが山よりも平地が圧倒的に多い渚沙では周りを囲む海と共に生活してきた。古くは漁業、貿易として、今ではその空気の良さと豊かな自然と人間世界との共生から第二の故郷として渚沙は有名だ。癒されたい方は是非渚沙へ。

それはともかく…今日もTAKAMILABは賑やかだった。

TAKAMILAB前の展望台：その山の斜面にある芝生に六人はいた：否、正確には三人と三体だが：

「んー…いい天気だねえ…」

「ほーんと…今までの事がウソみたい…」

海斗と麻依が芝生に寝転びながら暖かい光をうける。

例の事件の後二、三件事件が起こったがそれは警察沙汰になる前に収束しここ4日は音沙汰すらなく平穏な時が流れていた。

日曜の午後の昼下がりに、大智はお手製の元祖激激甘甘コーヒーを飲みながら笑っていた。

「海斗、そのノリで坂滑りやったらどうだ？」

「あ！いいな！！」

「…いや、降りたら戻ってくるのしんどいですよ…？」

「ははは、まあ気にしない、気にしない」

「あ、私も！私もやりたーい！！」

「……フッ……」

大智の提案を聞き立ち上がって何処かに行く海斗、それを軽く諫めるツバサ、樂觀的なエリカ、賛同する麻依………とつても平和な賑やかな一時ひとときだなとダイキは少し笑う。

今までこんなに賑やかな事は無かった。大智はいつもなら研究や勉強をやっているしツバサは資料の整理ー最近隣の市の資料の製作を始めているようだーエリカは経営のための予算などをしダイキ自身も前所長の残した開発をしたりG5のメンテなどをずっとと言っていていいほどしていた…しかし最近はこうして過ごす事も多くなつた。そう、海斗と麻依が来てからココは大きく変わったのだ。そう思うとダイキはまた少し笑う。

そうする内に海斗はどこからとも無く段ボールを取り出し滑り降り

ていきヒヤッホー！という叫び声が聞こえる…またダイキはクスリと笑っていた…

「…宿題できてるのか…？」

海斗が転けた。

――

楽しい日曜日というのは早くすぎるものである。そして、それに比例するかの如く月曜日は気怠いものだ。

…などと思いながら昨晚全力で宿題に取り組み寝不足な海斗は宿題は金曜と土曜にやってた麻依と正門をくぐりバイクを置いて来た後校舎に向かつて歩く。

ちなみに理系の大智は二年四組、文系の海斗、麻依は二年二組に在籍している。

…だから海斗と麻依は登校から帰宅まで（席が隣な事もあって）休み時間を除いてはほとんど一緒にいる…付き合っていないが（本人達談）。

…といつてもこれだけ一緒にいて噂にならない方が不思議である。恋バナ好きな女子や、からかい上手な男子のエサにされるのも当然の成り行きと言えよう。

そして、それは今日も例外では無い。

「よっ！海斗！また彼女さんとか？」

「…いや、なんでも言うのが彼女じゃねえし…ただの幼馴染だつて」

「またまたー！んな事いつてー！付き合ってるんだろ？ろ？」

「しーつーこーいー！付き合ってたねえってー！！」

そう互いの何方か一方が言う度に心に少しズキズキくる海斗や麻依

の心と反比例するかのようにからかい上手男子の一人で海斗の友人  
で自称（・・・）“一誰が呼んだか、渚沙の情報通”、佐和田 浩史  
は今日も朝から絶好調であった。

空は晴れ渡り気分は最高、地の文的にもナイスなタイミングでナイ  
スな一言を決められガッツポーズをかましていた。

「やりい！！」

「何が！？」

当然の如く海斗に突っ込まれる…が、浩史は怯まない。

「それはそうとして、海斗、お前結構ヤバい事やってるらしいな」

「…何を？」

「なんかバケモンと戦ってるだの聞くぜ？」

「…！！」

2人が浩史の方を見る…これでは容認したも同然のだが…あまり  
2人を見ていないのかとくに反応しない浩史を見て海斗は話を続け  
る。

「…なんでバケモンと戦わなきゃいけないんだよ。ってかバケモン  
ってなんだ」

「さあ…でもま、最近ここらの都市伝説になってるなんかのバケモン  
と黒いヤツと青のロボットの何かと身長的にも髪型的にも海斗  
っぽい人が一緒に結婚式場にいたとか…」

…俺の髪型、特徴的か…？そう思いながら髪型を少し気にして海斗  
はとりあえず尋ねる。

「…信用出来るルートなのかよ…」

「ああ、そこらへんは任しとけ」

そう威張る浩史。呆れ顔の海斗。しかしその顔とは裏腹に頭は少し  
混乱していた。その理由は大智が『もし…なんだが…もし世間にバ  
シたら渚沙は廃墟の街となってしまう…正体不明のしかも人殺しの  
怪物がいる街に住みたいヤツなんてそういないからな…だから出来  
る限り内密にしてくれ』と言ったからだ。

ならなんで海斗や麻依に何故バラした？と思うだろう…海斗もそう

であった。で、大智に聞いたら『お前らは信頼できるし何より渚沙が一番好きだろ？だから』確かに海斗と麻依は何より渚沙の事が好きだった。ここは日本が失いつつあるぬくもりを大切に守り続けている。そんな街だから彼らは何より好きであった。

…おっと、話がズレてしまつて申し訳ない。元に戻そう。

そう大智に言われた以上やたらと他人にはあかせない…それも情報通である浩史にバレたら…海斗はそう思いながら言う。

「まあ、とにかく俺関係ないから…それより、そろそろ予鈴鳴るから早くお前バイク置いてこい」

「いつけねえ！！じゃ海斗！教室で会おう！！」

「ハイハイ、いつてらっしやい」

「さらば！！」と言いながらバイク置き場へ走る浩史を0・67秒見送った海斗と麻依は校舎へ向った。

「海斗ー！後で宿題見せてくれー！！」

海斗は少しつまずいた。

――

「今日の授業なかなかハードだったね」

放課後、SHR…つまり俗に言う“終わり（又は帰り）のホームルーム”を終え部活命の生徒やバスや電車のシートに座りたい生徒がダッシュしたり女子生徒の一部が恋バナし始めたりする中、麻依は隣の海斗に話しかける。

「ああ…まあそーいう日はいつものアレだよな？」

海斗は口に笑みを含みながら帰宅の用意をしながら言う。すると麻依は急に立ち上がり歩き出す。



「そう！アレ！！海斗、早く行くよ！！」

「お、おい！だからちよつと待ってっ！！」

ドアに向かって一直線に歩く麻依に慌てながらついていく海斗。

そんな2人の前に…

「アレ…ってなに？」

「「うわっ！？」」

麻依の友人の一人で本をいつも片手に持っていて“少女”と言うのが  
が適当と思える風貌の“一「このまえ」結菜ゆいな”が前を遮った。

「あ、結菜ちゃんか！びっくりしたー」

「そう…ごめん…気になって…」

「えーっと…“カフェくりいむ”…って知ってるよね？」

「うん…新聞部でも…取り上げてたし…」

「その目玉商品の“おつきなしゅうくりいむ”のことだよ、美味しいんだあ」

麻依は両手を両頬にあてて今まさに食べているかのように言っ。

それを見た結菜は「へえ…」と呟いてから

「私も…食べて…みたい」

と呟いた。

「うん！じゃあ、一緒に行こ？」

「お、オイオイ、バイク最大二人乗りだから…」

今まで呆気にとられていた海斗が漸く我に帰り注意する…が…結菜はその風貌からはとても想像できない衝撃の一言を口にした。



らか（ネット上などで）“女神”と言われ全国大会では2位となり多くの（主にネット上の）ファンから悔まれた・・・と言っても彼女自身は2位でも十二分に満足したようで大喜びだったのだが・・・大学卒業後一年間の留学を経て故郷渚沙市にオープンしたのがカフェくりいむだ。オープン直後から何かと話題になって人気商品の『おつきなしゅうくりいむ』は一日千個を数えた事もある。

真奈実は店内に出てみる…今は7人前後だろうか…そう思うが早く真奈実はバイトの女学生と接客に勤しんだ。

「ありがとうございますー！」

カップルだろうか…男女2人を見送ると入れ違いに見慣れた顔二つと見知らぬ顔が一つやって来た。

「あ！真奈実さん！こんにちわー」

「こんにちわー」

「海斗くん？麻依ちゃんも！いらっしやい！…あれ？」

「…こんにちわ…」

そっぴいなながら入ってくる海斗と麻依、そして…麻依ちゃんか海斗くんの妹さん…？でも顔は似てないし…そう真奈実が考えてる内に麻依から説明が入った。

「あ、クラスメートの一結菜ちゃんです」

「…はじめまして…」

「あ、なるほどね！はじめまして、店長の岩瀬真奈実です」

結菜が丁寧にお辞儀をしたため真奈実も反射的にお辞儀をする。クラスメートの言葉に少し驚いて少し遅くなってしまったが…

するともうショーウィンドーから選り終わった…と言うか毎回大体同じ様な注文をする海斗が注文をする。

「えっとじゃあ、いつもの四つ…かな？」

「うん、分かったわ。ココで食べて行く？今結構空いてるけど…」

…当然だが『カフェ』とついている以上店内には客席が幾つかある。

真奈実が言う通り結構空いてるようだ…ま、平日のコーヒープレイク後だからだろう。

「どつする？」

「じゃ、そつじょ？」

「…っん」

「じゃ、480円になります」

「あ、はい」

「はい、500円ね…はいお釣りと…コレね」

そう言つて20円と『おつきなしゅうくりいむ』四つ…海斗と結菜が一つずつ麻依が2つをプレートに乗せて渡す真奈実。それを受け取り席へ行こうとした海斗を真奈実が呼び止めた。

「あざーす」

「あ、海斗くん」

「はい？」

すると真奈実は海斗の耳元で…

『…で、どつちの娘が好みなの？』

『は…！？』

『まー、いっつも一緒な麻依ちゃんが本命なのかなー？それともあの子？あの背の小さな…結菜ちゃん？』

『えーえーと…』

キョドる海斗を見て微笑み真奈実。彼女も女である以上こう言う話には目が無いのだ…と言う名目でからってるだけだったりするのだが…

『どつちななのよ？』

『え、え、えと…麻依とは幼馴染ですし…一は麻依の友人ですし…』  
海斗はブツブツ独り言の様に言い訳する。この海斗の様子を見て真奈実は笑いながら「ま、頑張れ」とだけ答え仕事に戻った。  
残った海斗は頬を朱くしながら麻依達の元に向った。

日も沈みだしひっそりとした渚沙高校校舎裏では男子生徒何人か…俗に“不良”と呼ばれる集団がある男子生徒…八木<sup>やぎ</sup> 孝<sup>たかし</sup>を囲みいつもの通り金を要求していた…つまりカツアゲと呼ばれるものだ。

「オーオーオー？今日も持ってきたか？」

「早くだせよ？イタイの嫌いだろ？」

いつもなら黙り込んで何もしない孝…だが、今日は違った。突然口を開きクスと笑った後こう告げた。

「…うん…こいつをね…ハイ」

すると孝の後ろから黒かどす赤いような影…アカシユモクザメサイラが現れた。孝は尚も続ける。

「イタイの…嫌いだよね？」

「…うつつわああああ！！！！」

「なっなんだ！？」

「…にっ逃げる！！！！」

慌てふためく不良達…それを笑いながら孝は命令する。

「さあ、まずはあいつらから…食べちゃってよ」

そう言われると待つてましたと飛び出すアカシユモクザメサイラ。

不良達は必死に逃げるもののすぐにサイラにあと少しにまで追いつかれてしまった。

すると…

「ハアツ！！！！」

「グエツ！！！！」

突然少し遠くから蒼のプラズマ弾がサイラに当たる。しかし少し怯むだけでまた追い始めた。

「クソッ」

声が出たかと思うと急にサイラの前に青い人（？）が立ち、蹴る。強烈だったようでサイラは吹き飛ばされ倒れ込むが気を取り直して前を見る。

すでに不良共は四散してしまつて真ん前に一人立っているだけのようだ。

「お前は……………誰？」

「……………俺は仮面ライダーBEST。お前を封印する者だ」

そう告げるBESTWF。すると興味が無いのか適当に答えるアカシユモクザメサイラ。

「ああ、そうか。オーシユ様が言つてたなあ……………」

オーシユ……………“魚類”の記憶のカオス……………大智自身何度もやられた事のある相手だ。チツと軽く舌打ちしながら大智は銃口を構える。

「どいてくれない？邪魔」

「残念だが無理な相談だ。犠牲者を出すわけにはいかないから……………」

「犠牲者？美しいテラの再生のためには、当然の末路だよ？」

「違う、人類みんなで力を合わせたら地球は良くなる……………そのためには決して一人も欠けてはいけない！」

そう言うと青い脚が怪物目掛け走り出し右手を大きく振りかぶる。

それに合わせて黒い脚が間合いを詰めていき……………邪魔者（BEST）に向け左手を大きく振りかぶる

「ハアッ！！」

バシイイイイイイイン……

互いに拳が胸に炸裂し合った。

## 復讐と噂と一之瀬海斗（後書き）

テストが散々で萎えてる時流です…まあ予想通りなんです。

今回新キャラファイバーです。結菜の苗字は“一”と書いて“にのまえ”ですよ！！覚えましたか？

…あ、彼女、結構小さい子に見られるの気にしてるんで…ハイ、やめてあげて下さい。バイクが大きいのは多分その反動です…何時の間にかデカくなってたんですが…

文学少女！！って感じですね。因みに一押しは「そして誰もいなくなつた」らしいです。私は読んだ事無いですが。

自称誰が呼んだか渚沙の情報通、佐和田浩史…書き終わって気づいたんですが、私の好きな漫画家さんの名前（漢字は置いといて）じゃね！？…状態です。すみません、何時の間にかそうなってたんです

情報通名乗るだけあって流石の情報力。ただし、信用性は微妙です。今回は当たりだったんですが。

最後の新キャラ、岩瀬真奈美。これは…カフェくりいむが本編本格参入か！？

因みに彼女、凄い人です。多分某天の道を往き総てを司る男も唸るはず…ただ、自分の能力を自覚していないだけで。

カフェくりいむは朝9時から夜9時まで営業しております。（月曜日と第一、第三木曜日と年末年始、お盆は休業）渚沙に来たら是非寄って下さいな。

さてと…キャラ紹介更新しないと…原警部に西村調査官、G5すら書いてない…纏めて頂ければありがたいのですが



さて、この話来週に終わらせたいな!!そしてクリスマスには…!!

## 仕事屋

バシィィィィィィン……

火花が夜道を照らす…が、僅かに大智の拳の方が速かったようで大きくよるめくアカシユモクザメサイラの一撃はかする程度で大智にダメージは殆ど無かったがアカシユモクザメサイラは体をよるめかせて逃げた。見るともうサイラの使用者も逃げているようだ。

「逃したか…」

流石にこの夜道で探す事は不可能か…大智はそう思い変身を解除する。

昼見慣れているこの渚沙高等学校の校舎も夜みると何とも言えない不気味さを放っている…この姿をみると例の『学校は墓地の跡地に建てられた』的な怪談もあり得そうに思う。まあ、部活をやっているのか自主練なのかちらほらと生徒がいたのだが。

……哀愁に浸る前に、バイクで帰るか…寒いわ…そう（関西弁がややでてているが）思つてバイク置き場に向う大智。ふと頭上を見る。空気が澄む渚沙市では星が綺麗に光っている。そんな中…

「あ…」

一筋の光の帯が横切った。流れ星だ。よく考えるとただの宇宙のチリ…良く言えば星の欠片が大気圏で燃え尽きるだけの現象なのだが、たったそれだけの現象でも古来より流れ星と言うのは人々の心を癒して来た。『流れ星に願い事をすれば叶う』…回数はどうあれ貴方も聴いたことがある。その事からも分かるように流れ星とは人々の目に美しく見えるものだ。

…だが大智は流れ星を見ると顔をしか顰めた。あの日のコトが一瞬頭をよぎる。フーと深く大きくため息を漏らす。そして少しだけその場

で佇み、大智はまた歩き出した。

――

「ぎゃああああああ！！」

「ククク…」

夜中に響く叫び声。その声の主であったそれは地面にぐったりと力なく倒れていた。紅い影はそれを見て少し笑いながら後ろに控えている人間に話しかける。

「終わったぞ」

「フツ…これで十七か…村正の名も上がっただろう…正義の味方…と」

「人に知られぬ正義の味方…って訳か」

「そう言う事だ…さて、次はどの悪を懲らしめるか？…ククク」

「クククク…」

するとその一人と一体は闇に消え辺りは静寂に戻る。ただあるのは人間だったものと未だ電流が少し流れている何かの機械だけだった。

――

大智がTAKANILABに帰ったのは7時過ぎの事だった。いつもの通りバイクを止め、ホールに入る。するとツバサとエリカの二体がお出迎えしていた。

「ただいまー」

「お帰り！」

「お帰り、大智。夕飯もう少しかかるみたいだよ」

「へえ、なら手エ込んでるのか？」

「さあね？」

そう言い合い笑い合う大智とエリカ。ツバサは県内のニュースに食らいつついているため話に参加しないでいた。ちょうどその頃流れて

いたお正月関連のニュースでもうそろそろ正月かと四度目の正月を  
楽しみにしながらニュースを見ていた…

と、すると「出来たぞ〜」と奥から声がかかる。ダイキだ。三人は  
夕飯を食べるため食堂に移動する、もちろん電気も消して。だが、  
ツバサはうっかりテレビを点けたままにしてしまっていた…

「……ここで速報です。渚沙市内の路地で遺体が発見されました…」

「…現在入りました情報によりますと十代後半から二十代の男性で  
…」

「…遺体には謎の火傷が残されており…」

「…警察では犯人はまだ市内にいるものとして嚴重な注意を…」

――

「あー、今日も学校かあ」

欠伸びながらバイクを走らせる海斗。麻衣との待ち合わせ場所は家  
からすぐその距離だが時間があるので何となく遠回りして待ち合  
わせ場所に行っていた。

「なにこれー」

「さあ…?」

歩道から聞こえてくる声。ほんの一瞬だが何故か海斗にははつきり  
聞こえた。「ん？」と海斗は反応するがバイクを止めて確認するだ  
けの余裕は無いため特に気にせずいつも通りの時間に待ち合わせ場  
所に到着した。麻依はもういたため少々申し訳なく思ったが。

「あ、海斗！おーい！」

「早いな、麻依。寒くねえか？」

「寒いに決まってるじゃん！早く行こ？」

「ああ、すまんすまん、はい、ヘルメ」

ぼんとヘルメットを麻依に投げてからもう一度愛用のグローブの位置を弄る。その間に麻依は早くも後ろに乗って海斗に捕まっていた。海斗は「じゃ、捕まつとけよ」と一声掛けてからバイクを走らせた。

登校中、何度か人が集まって壁やら電柱やらを見ているのが見えた。迷い猫などの類でこれだけ人集りは出来無いはずだ…

「なあ、あれなんだと思う？」

海斗は辛抱たまらず麻依に聞いてみた。

「あれ？…ああ人集り？なんかの祭りとか…」

祭り…毎年こんなことしてたか？そう考えながら海斗はクリスマスが近づいていることを思い出す。

「…あ、この時期なら…クリスマス関連かな…」

「あ、なら私と海斗…」

麻依が言葉に詰まらせる…これは…！？

「大智とツバサとエリカとダイキの六人で行こうよ！！」

「ガクッ！！」

思わず海斗は声をだしながら肩を落とす。

「え！？…どうしたの！？」

「…いや、なんでもない」

そらそうだよな…そう思いながら海斗はバイクを走らせた。

――

さて、問題。渚沙高校に着いてまず第一声に海斗が言ったことはなんだろうか？

「おはようございます」「？」「よ、（人名）！」「？いや、いつもならこれで正解だ。だが今日はコレだった。

「おはよ…え？何これ？」

「うわ…気持ち悪い…」

そこには何故か気持ち悪い絵のオプション付きで「あなたの代わり

に懲らしめます。仕事屋村正」と大きく書かれ、下にはご丁寧に電話番号が書かれているポスターが正門に二十数枚貼られてあった。

「誰のイタズラ…?」

「この仕事屋って奴だろ…」

麻依は驚愕の表情を浮かべながら手で顔を抑える。海斗はポスターの一枚をペリツと剥がし詳しく読む。

「…あの人集りはこれが原因の様だな」

「こんなの普通の考えじゃ無いね…」

麻依がポツリと呟く。  
すると…

「あ、佐原さん、一之瀬くん!」

そう言いながら彼らの担任、“曾我部そかべ 玲香れいか”先生が走り寄ってくる。

「どうしたんですか? 曾我部先生」

「ごめん、ちよっとだけ剥がすの手伝ってくれない? 今さっき剥がすスプレー取って来たの!」

そう言う曾我部の両手にはスプレー缶が握られていた。

「いいっすよ、な? 麻依」

「うん」

「ありがとう…じゃ、コレ使って!」

「分かりました」

「了解です」

そう言う曾我部は向かって右側、海斗と麻依は向かって左側を剥がしていった。

――

あのポスターは校内の掲示板にまで貼られていた。ここまでくれば事件性はあるものの校内の生徒によるものとも十分に考えられるため渚沙高校では警察に被害届を出すの見送ることにした。理由は

勿論、渚沙高校にもプライドと歴史があり、それを汚したくはないため。高等学校が警察に届け出ないのはそれで信用を失い良い大学、良い就職が出来なくなるのを避けるため、これに尽きるのでは無いだろうか？

それはともかくそれは勿論大智も目撃しており、それを見た瞬間ヤツかと内心呟いた。

「…」

「なんだ大智、うかねえ顔しやがって」

「…いや、何にも無い」

隣の席の立野たちの義明よしあきが話しかけるが大智は顔を逸らすとそのまま教室を出た。

義明は頭を掻きながら少し口元を緩ませてこっポツリと言う。

「…何を考えているのかな？高見は…」

フフフと言う声が口から漏れた。

――

仕事屋事件もすぐにただの噂となり日は西から照らしている昼下がりにSHRが終わり大智は校内に残ってアカシユモクザメサイラと使用者を待つ事にした…

「なーにやってんだ？大智」

不意に声をかけられビクツとなる大智…くるりと後ろを向き声をした方を見ると義明がいた

「義明か…何って自習だが？」

大智はカントンに言う。すると義明は軽いステップで近づいてきて大智に言う。

「ふーん、ならココ教えてくれよ」

「…仕方ないな…って、ココかよ！？」

「まさか…お前も出来ないのか!？」

「違う!…説明すんのがだりいんだよココ…」

「まあまあ、頼むつて!!お願い!!」

「…たくつ…いいか?ここはな…」

こうして義明と大智の勉強会が始まった。

――

日もほとんど西に傾いたPM17:24。

孝は周囲を十分確認しいつもの場所にいった。すると案の定不良生徒はたかつていた…が、孝を見るたびたじろぎ、始めた。

「愚かだね…今日で終わりだよ…」

「てめえ、一発勝負殴らせろ!!」

一人が突出し右拳を振るう、が孝に当たる前に人間のものとは違う手がその拳を押さえつけていた。その手で拳を押さえつけたまま空いている腹に反対の手が一発パンチをいれた。すると意図も簡単に彼の体が宙に舞う。「うわああああ!」と情けない声を出し校舎の壁を強打して倒れ込み気絶する。それと同時に他の不良達は「うわああああ!!」と叫びながら四散する。それを容赦なく片っ端から殴り飛ばすサイラ。大智が来た頃には3人前後がぐったりしていた。

「遅かったか…」

チツと舌打ちをしながらバックルを腰に当てる。そして走りながらカードをスラッシュする。

「変身!!」

BEST Card Change!

走る大智の周りに黒いエネルギー体が集まり球を創る。

「ハアッ!」

大智は鋭く言うとともに右手手刀で横一文字にエネルギー体を切る。



そこにいたのは赤く大きな複眼を持つ黒の戦士、仮面ライダーBESTだ。

「俺は…1番となる者だ！」

そう言いながらサイラに殴りかかるBEST。しかしそれをカンタンにかわずと今度はサイラが殴りかかる。それを右斜め前に前転受け身を取り避ける。そして立ち上がり体を捻る勢いのままサイラにストレートパンチを浴びせた。がサイラは右腕でそれを捌き、左パUNCHでBESTを飛ばす。

「グアッ」

ぶつかった場所がフェンスであつたのが功を奏しある程度衝撃を吸収できた…しかしこのまま戦っていても力でヤツにかないそうもない。

「仕方ないか…」

そう言いながら取り出すのは緑色のカード…LEAFのカードだ。バックルを横に戻しカードをスラッシュする。

「変身！」

LEAF Card Change!!

斜めに押し戻したと同時に緑のエネルギー体と木の根が球を描きながら大智を包み込む…

「ハアッ！」

大智が右手手刀で裂く。するとそれまでそこにいたBESTは緑と銀の鎧を纏いし剣士、リーフフォームとなっていた。右手に握り締めたフォレッサードが夕陽を反射し光る。そのままカードケースをポンと叩く、と、様々なカードが勢いよく飛び出しBESTの周りに散らばり宙を舞う。そのうちの一枚を掴むと大智は大音声とともにスラッシュした。

「オマケだ！」

LEAF Attack Card Go!!

すると右手のフォレッサードから緑のエネルギー体が現れ鞭の様にしなる…すると大智がフォレッサードを振る…とそれに合

わせそれが距離を置いてるサイラを斬る。リーフフォームの攻撃技、リーフウェツプカットだ。

絶えぬ鞭の攻撃によるめくサイラ。

「よし…このまま決める…」

そう呟きながら少しずつ押し歩いていきながら必殺のカードを取り出す大智…が、

ドン！ブフアアア！！

「があッ！！」

突然空から炎が降ってきてそれにより攻撃が中断される。

BESTLFは軽く吹き飛ばされ地面に体を強打する。「グアッ」とまた情けない声を出し痛みにも耐える大智…

しかしそうしてもいられないのでフォレッツサーソードを地面に挿しそれを頼りに立ち上がり少し顔を上げる…見るとサイラとBESTLFの間に一人の人間と紅蓮の一悪魔（異形の者）がいた。

「仕事屋村正、参上…」

人間の方がそう名乗る。

「……………」

大智は仕事屋村正の顔を見る…がその顔には狐のお面がしてありはつきりとは分からない。が、横に控えている異形の者が何かは分かっていた。

「…そいつは初代BESTが使っていたフレームレジェンド…否、今はフレームカオスか…」

「ああ、よく分かったね…でも今は俺のモノだ」

そう言うと仕事屋村正は徐に先程散らばったカードの内、手元に戻ってこなかったカードを拾い上げ大智に見せる。

「ほら、君のFRAMEは何も書かれてないじゃないか」

「…確かに…そりゃそうだ…レジェンドが入っていないのだから…」

そう大智が言うと仕事屋村正は深く頷く。

「そう…長話は面倒だし、今日は帰るよ。じゃ、BEST君、また会おう」

そうして踵を返す仕事屋村正。だが大智はフォレッサードを杖にし待ったをかける。

「待て!!」

「…相手してもいいけど…木が炎に勝てる自信でもあるの?」

仕事屋村正が仮面の下でクスリと笑う。それもそうだ。その質問の答えは勿論Noだから。

本来BESTは陰陽道の五行のチカラを使い戦える戦士であるため各々の特徴が一長一短はつきりしている。つまり相手に合わせて的確使い分けて戦う分には強いのだがその分弱点はとことん弱い…基本のBESTフォームは弱点は攻撃方法以外では少ないがその分火力も弱い。炎に勝てるのは水だが今フォームチェンジしようとしたらそれこそ命取りだろう。

つまり戦うのは無謀なのだ。

「違う、何故お前はあいつらの味方をする!??」

大智が解せない点、それは「懲らしめる」と書いていながら加害者であるサイラ達を庇った事。すると仕事屋村正はクスリと笑ながら返答した。

「それは勿論、あの不良達を倒そうとする義心を潰さないためだ」

「義心…?」

「そう…悪は全て摘まなきゃいけない。それを行う者を斬るなんか俺は出来ないな。義を明らかにする…それが仕事屋村正の

使命、悪を擁護するお前は悪と言う事だ」

「なんだと?」

大智はフォレッサードを杖に叫んだ。

「確かに彼らは道を外しているかもしれない…だが、人の心はお前が思うよりもっとずっと強い!!そしてその心の強さは、どんな間違いで正す事が出来る…それが人間だ!」

大智は言い切ると同時に体を地面に屈した。それと同時に変身も解

除される。

「…じゃあね」

その言葉だけが耳に残った。

仕事屋（後書き）

iPod touchがああああ!?

ヤバい今後更新できるか分からないイイイイ!!

## 熱き心（前書き）

映司「前回の3つの出来事！

一つ、仕事屋村正のチラシが街中で貼られる。

二つ、不良に報復して来た孝とアカシユモクザメサイラに大智がBEST LEAF FROMとなって立ち向かう。

そして三つ、仕事屋村正とフレイムカオスの前に大智が負けた！

翔太郎「俺たち来た必要ないじゃねーか！？」

フィリップ「フレイムとは炎と言う意味らしいよ、翔太郎！」

翔太郎「今関係ない！！」

映司「一度串田さんの真似やってみたかったんですよ」 幸せそう

麻依「Now, Kamen Rider BEST start  
! Let's show time!!」

## 熱き心

「ん……」

「あ、目が覚めた!？」

「ん……ああ……」

大智はゆっくりり体を起こす…隣にはエリカがいた。

「体を起こして大丈夫なの？」

「んー、痛いがまあ大丈夫だ」

そう言つて大智は気丈に笑つてみせた。

エリカの話によるとあまりに帰りが遅いためツバサが大智を迎えに行ったら大智が気絶して倒れていたらしい。ツバサは急いで連れて帰つて怪我に手当をしてエリカが看病をしていた。

「…なるほどな。すまん、エリカ、迷惑掛けて」

「ははは、ロボットに迷惑なんてないよ、大智。寧ろこう言う時の私じゃない？」

エリカが優しく笑う…ロボットだと分かつていてもとすれば人間のものと見間違ひそうになる笑顔。そんな笑顔を見ていたら人間の苦難をロボットが引き受けてしまうのもどうかと大智は少し思った。

「そうなのかな…」

「ところで大智何があつたの？」

「ああ…フレイムカオスにやられてな…」

「フレイム…」とエリカは呟いて何かを考えていた。

「あ、そう言えばまだ麻依ちゃん達いるはずです。大智の事すつこく心配してたよ」

「おっと、それは行かなきゃならんなア〜」

大智はそう言いながら笑つた。…笑い過ぎて怪我の部分が痛くなつたが…

「立てる？」とエリカが松葉杖を出して来た。それを有難く頂戴し

て大智は立ち上がった。

――

「大智がやられた」

いつものようにTAKAMILABにやってきた麻依たちを迎えたのはこの言葉だった。

直ぐに大智が寝ている部屋に行った。体に包帯を巻いて眠っている大智に麻依や海斗は衝撃を受けた。幸い骨折などの大きなケガは無いが打ち身が激しく少なくとも一日は安静をしなくてはならないらしい。

そして今、麻依たちはホールで大智の目が覚めるのを待っていた。時刻はとつくに七時を過ぎた…いや、もう殆ど8時だろう。麻依は俯き海斗はそこら中を歩き回っていた。

「大智…」

「あー！もうクソ！！俺はどうしたらいいんだ！？」

「落ち着いて下さい！海斗！」

「落ち着いていられるか！！」

ツバサの言葉を聞いて海斗は叫びながら近くのカラのゴミ箱を蹴り倒した。と、すぐ近くのイスにドスンと座り頭を掻きむしった。

「…イライラしたって仕方ない…分かってるだろ、そんなこと」

ダイキが腕組みをして背を壁にもたれかけた状態で言う。と海斗は立ち上がるといきなりダイキの胸ぐらを掴んでこう言い放った。

「イライラするに決まってるだろ！！逆にイライラしねえー方がおかしいだろうが！？お前は人間に限りなく近いがやっぱり所詮は口ポットなんだな！？」

「…」

「主が倒れてもそんだけ冷静だなんてホントに血も涙もないただの機械だな！！」



「…俺がどんな思いでいるか分かってるのかお前！」

そう言うとダイキは海斗の袖を掴むと綺麗な一本背負いをした。ダアン！と地面に叩きつけられる海斗。いつもなら投げられる手前でジャンプし相手の勢いを利用して前宙をする海斗だが冷静さを失っていたためモロに食らってしまふ。そしてダイキは倒れた海斗の胸ぐらを強く掴むと大声で叫んだ。

「心配に決まってるんだろ！！あいつを助けるのは所長の最後の指令であり最初で最後の頼みだ！！だが出来なかった、ホントなら今すぐにも自分で自分をスクラップにしたい、だがそれをしたからどうなる！？起きた大智は喜ぶか？死んだ所長は喜ぶか？だから今はイライラする時じゃ無いんだ！！冷静さを保たなきゃいけないんだよ！！！」

「やめる、ダイキ」

ドアの方から声がかかる…ダイキと海斗はその方向を見る…と…

「大…智？」

「大丈夫なのか？お前…」

「ははは、大丈夫では無いな…イテテ」

大智が立っていた。

「大智！」

麻依が文字通り飛んで大智の元にいくと飛びついて抱きついてた。「イタタタタツ！！おい、こら！ちよっ、麻依！！イタタタタツ！！！」

大智が叫ぶ…すると漸く麻依が我に帰り離れていった。

大智が来た為に止まっていた海斗とダイキだったが海斗がダイキの手を振り払って立ち上がった。…その後海斗は大智のトコにいき「大丈夫か！？」と聞いたのは言うまでもない。

大智をとりあえず座らせみんなで思い思いに大丈夫？だの聞いたあと何があつたか色々話を聞く事になった。

――

P i P i P i P i P i P i P i !

大智が痛みを訴え部屋を出ようとした時、サイラ出現の警報がなった。

「こんな時に…」

「寧ろこんな時だからじゃないか？」

麻依がポツリと呟いたのをみて大智は当たり前かのように言い放った。それどころか

「でもま、敵さん、G5の事は知らないみたいだな。俺だけで戦っていた意味があるつてもんだ」

と予想通りと言いた気に大智は言った。そう言えば大智がアカシユモクザメサイラと戦っていた時、なぜかG5は来なかった…と言うのも大智によつて警報機の電源が落とされていたのだ。それにエリカが気づいたのは大智が気絶した少し後。大智曰く、「あのサイラを軽く見ていたのもあるけど、不測の事態が起こった時戦力を無駄にはしたくなかったんだ」と言う事らしい。そしてその通りの事が起こった。

「だけど、予想外なのはあのサメの硬さ。サメ肌がかなりの防備になつてる…フォレッツサーソードもヤツを押す事は出来ても刃自体は歯が立たなかった」

「つまりG5では追い払うのが限界…と？」

そうツバサが聞くと大智は「かもしれない」と呟いた…すると大智の口からとんでもない事が飛び出した。

「と、言うわけで、俺も行くしか仕方ない」

「…そのケガで!？」

大智は「仕方ないだろ」と言つて行こうとするが勿論全員で止める。「ならどうするんだ…ツバサやダイキのG5単騎じゃ追つ払う程度だ…」

と大智は何故か力を込めて言う。そして海斗の方をチラッと見た。それに気付いてない海斗はスツと立ち上がるところ言い放った。

「俺がG5になる！」

「え！？」

「一瞬場が凍る…と、ダイキが口を開いた。

「お前この前無理だっただろ」

「だけどそれは転送するのがダメだっただけもしかしたら着装したら出来るかも！！」

「着装出来ても相性次第では動かない…ムリだ、海斗」

「やって見ないとわからないだろ？」

ダイキが海斗を押し留めようとし、そのダイキの反論を押し切ろうとする海斗。その2人の間にはツバサも驚くほど火花が散っていた。その光景を見て大智はムリに作ったようにしかめっ面を見せ、そしてこう言った。

「…ダイキ、アレの整備、一応してるか？」

「アレ…ああ、アレか…ああ、一応してるぞ…ってアレをどうする気だ！？」

「持ってきてくれ」

「だけど！」

「持ってきてくれ！早く！」

大智が叫ぶ…が叫んだせいで傷が痛みイテテと力なく言っていたが…その間にダイキは愚痴を吐きながらも“アレ”を持ってきた。

「え…！？」

海斗と麻依が思わずハモって驚く。その“アレ”は青と銀の“鎧”で腰の位置にはベルトがあり肩に黄色で名前が書いてある…それこそまさしく大智達が幼い時に見たあの“戦士”…

「G3-X！？」

「そんな名前のやつ！？」

仮面ライダーG3-Xだった。

「良く考えたら当たり前の事だろ。父さんはまずコレを試しに作ってそれからG5を作ったんだから。つまりコレが高見研究所最初の開発物ってワケ」

「だが大智、コレは実戦向きとは言えないぞ……」

ダイキが意見する。それもそうだ。所詮はテレビ上のモノを真似て仮に作ったモノ。だから実戦で使用しても効果は期待でき無い……寧ろ足でまといになるやもしれない。

「確かにそうだけど……まさかあの父さんが無駄なモノは作らないさ」  
「だが性能は……」

「確かにG5よりは性能は悪いけど、海斗が使うなら足でまといどころか奇跡が起きるかもな」

大智は意地悪そうに笑う。この時エリカは分かった。大智は……

「じゃダイキ、G5になってヤツを倒してきてよ」

「は？」

「え？」

ダイキと海斗が凍りつく……

それはそうだ、さつきまで喧嘩してたのだから。もちろんそれはエリカも大智も知っている。あれだけの騒ぎが遠くならともかく近場で聞こえないワケが無い。最も大智の部屋は一番ホールに近い部屋だから尚更だ。

「いやいやいや、ツバサ、お前行け」

「ムリ。コレ出すんだったらG3-Xのサポートとその他諸々あるから……」

「俺がそれをするって言うのは？」

「んー、出来無いでしょ？車出すんだよ？」

「……じゃ最悪エリカ」

「誰がこの研究所に残るのよ」

「……俺が残ってー」

「それはダメ」

ダイキが色々頼むが全部断られ渋々支度をするダイキ。一方海斗はツバサによってG3-Xを着装した。そして動けるかどうかシャドーをしていた。

「どうですか？海斗。ちゃんと動けます？」

「うん、バッチリ！…まさかG3-Xになれるなんて…！！」

「ははは、良かったな、海斗」

目をキラキラさせて喜ぶ海斗に大智は笑いながら言う。

するとダイキも支度が整ったようである。ダイキはG-00オートバイに騎乗、ツバサと海斗は入り口側の車庫とは別にある車庫からワゴン車に乗り込み発生地点に向かった。

それを見送った大智と麻依とエリカ…と、すると突然大智とエリカが笑いだす。麻依はワケがわからずただ混乱していた。

「え？ええ！？」

「ふふふ…大智…もっと方法あったんじゃないの？」

「何、ははは…あの2人なら負けないさ…だって…」

――

「ぎゃああああ…！」

2人組の渚沙高校の不良が夜道を逃げる。体力は殆ど限界に近いが逃げなくてはならない…何故なら…

「待て！！」

そう言って走る赤い足…アカシユモクザメサイラが後ろから彼らを追いかけているからだ。

その後ろでは孝が事の成り行きを見守っている。

「三人は病院行き…あの2人は…殺そつか…」

笑みを浮かべながら平然とその様な言葉を吐き捨てる。彼らのグループは確か七人。彼はあと残った2人に行く復讐を頭の中で考えて

いた。

「うわああああ!?!」

「待てえええ!」

鬼ごっこは尚も続く。だが人間とそれ遙かに超える力を持ったモノが争って人間が勝てるワケが無い。夕方逃げた体力も回復していな  
い今なら尚更である。不良2人はついに地面に倒れ込んでしまいサ  
イラにあと一歩まで迫られた。

「これでおーわり。…殺っちゃって」

「ああ、分かった…死ね!!」

サイラが右手を振りかざす。

その刹那、サイラの背中に銃弾が撃ち込められる。

「ぐあつ!?!」

「だっ誰だ!?!」

いきなりの奇襲によるめくサイラ。孝は後ろを振り返りながら叫ぶ  
…が、いきなり強い光がその目に焼き付いた。

「なっ!?!」

よく見ると2つの人影が見える…そのうち身軽そうな左の人影から  
その強烈な光が出ている様だ。サイラは孝の前で孝を守る様に立つ。  
使用者がいなくなればサイラは意味を無くすから、だ。サイラはそ  
の二つの人影に向かって叫ぶ。

「誰だ!?!」

「誰?俺はただの人間だ!」

その言葉と同時に右の人影が走り寄って来た。闇の中から現れる赤  
の大きな複眼の光が徐々に迫ってくる。

「ハアアアアツ!」

「…フン」

サイラは軽くあしらうかの様に息を漏らし、相手に合わせて拳を構  
える。

「海野流合気道術…四の型…」

「は?」

「龍負！」

サイラが一瞬動きを止める…と、気づいた時にはサイラは地面に叩きつけられていた。

自分の気を使い相手を投げる技、龍負…それをまともに食らったサイラは持ち前の防御力である程度相殺されたもののダメージを負ってしまふ。

「ぐあつ!?!」

「…おお!! G3-Xって中々パワーある!!」

「馬鹿だな… G3システム系統はこう戦うんだぜ?」

そう言つと左にいた人影は発光を抑えて右手に構えた銃でサイラを撃ちまくる。そうしてサイラに立ち上がる時間を与えずにそのまま走り寄ると少し間を開け上体を起こさせるとスピードを生かした右足でキックの連打を叩き込んだ。

「ハアアアアツ!」

徐々にスピードを上げていく…最初は腕で受けていたサイラも押され始めた。

「クツ…ハッ!」

「なっ!?! ゲアツ!」

「え? うわあああ!」

サイラは頭から水流を出しLost G5とG3-Xを押し流す。強烈な水流により倒れ込む2人。回路のショート箇所が二体でいくつも見られ特に後ろで控えていたG3-Xはともかく正面にいたLost G5は直撃となつてしまい命とも言えるハイスピード機能が使用不可となつてしまふ…

「クソ!! まさか水を出すとは…」

「ダイキ、どうする!?!」

戦況はあの一撃だけで一変… G5で応戦するとしても慣れてない装備にあの防御力は苦戦するのが必至…なら…

「…致し方無いな…次で決めるしか…」

「だな…」

しばし沈黙が続く…だが2人はお互いの顔を見合つと右手を握りあつた。

「よし、やるか!」

2人は立ち上がる…海斗は専用武器ケルベロスを取り出し、ダイキはG5に戻つたあとG-04ランチャーを呼び出した。

「ケルベロスファイヤーは一発だけ、そしてコツチもG5に戻つたといえさっきの攻撃のためにこの攻撃の一撃だけしかムリだ」

「単発じゃダメだから…チャンスは一度…か」

「ダイキ、海斗!」

ツバサから通信が入る。

「不良2人とそのサイラの使用者は保護したから後ろの事は気にす無いでいいですよ!存分にやっちゃえ!」

「ああ、存分にやらねーとヤツは倒せねーからな!」

ダイキはG-01ショットで敬遠する…勿論コレはサイラに効果は無い…ダイキが狙っているのはそれで怒ってここに近づいてくる事…そしてその通りに怒りに任せたサイラが走ってくる。それをケルベロスの連射が足止めする。

P i P i P i      E N D C o d e …

G-04ランチャーに全電力が集まる…海斗もケルベロスに弾を装填する…二つの照準が一つに合わさる。

「行くぞ!」

「ああ!」

「ハアアアアアアアアアアアアツ!」

ケルベロスファイヤーとフォーエンドシュートが一つに合わさりサイラを貫く…と次の瞬間ドカアアアアアアアアアアと音を立ててサイラは爆散した…

地面に倒れ込む2人…

そこにツバサが寄つて来て勝利を分かち合つ…



――

一方高見研究所ではツバサの一報により三人が笑っていた…大智は痛そうにしていたが…

「イテテテテテ！」

「大丈夫！？」

「でも…な？言っただろ？奴らは中に持つてる熱い気持ちってやつ？は一緒なんだ。同じ気持ちを持つ者同士攻撃の息が合う、例え喧嘩してもな」

「それにしても…ホントに人間そっくり…」

「ははは…そこまで似てますか？」

「ああ…十分すぎるぜ…ハア…全く…とーさんは大変な遺産を残してくれたもんだぜ…」

「ハハハ…まあ、その方が楽しいじゃん！」

「麻依ちゃんの言う通りだよ、大智」

「まあ…そうだな」

大智がそう言うと三人は互いに顔を見合わせる…そして誰からとも無くプツと吹き出した。

そうして、高見研究所に笑い悲鳴が響いた。

「ハハハハハ！」

「ははは…うぐっ！？いてえー！ー！？」

「ハハハハハハハハハ！」

## 熱き心（後書き）

あれ？この話は結局なんなんだ？そんなアカシユモクザメサイラ編でした。

すみません、時間がなかったんです…あと書きたい事が纏まらなくて色々ごちゃごちゃしちゃったんです。

ところで大智の活躍が無いなあ…

さて、皆さんお待ちかねじゃ無いけどとりあえず文章繋ぐためにお待ちかねと言ってみるでお馴染みのド耐WORKクリスマス特別編！まだ出来てません！！

24日に更新されなくても25日まで怒りを抑えてください…25には…ハイ…すみませんでした…

Episode 0 G5 戦士の軌跡

System

Episode 0…つまり番外編です。  
これはある夜の物語…

ダダダダダダッ！！

外からみると…否、普通に生活していても何の変哲もない街、渚沙。今日と言う日も数多くの人が道という道を行き交いまさに平和の中で暮らしている…

人知れず今夜も怪物と人類の戦いが行なわれていることなど知らずに…

タッタッタッ…

「待て！！」  
ダダダダダッ！！

青と銀の装甲に赤く大きな複眼を持つ多目的用特殊装甲具、仮面ライダーG5に身を包んだ“ツバサ”はそう叫びながら専用武器G-06マシンガンを連射する。しかし一向に目標ターゲットに当たらない。これでは逆に被害が広がってしまう…そう考えたツバサはG-06マシンガンの装備解除を行い素早く腰に挿したG-01ショットを取り出しGO-11スコープを召喚しショットに取り付けた。

「すばしっこいですねえ…流石はペルシヤネコサイラ…でもま、男にはやらなきゃならねー時つてのがあるらしいですからね」

そっついながら狙撃を始めるツバサ…因みに“男”と言ったが彼に生物学上の性別などない…そもそも人間でも生物でもない。

彼は高見研究所…通称TAKAMILABで開発された高性能次世代型ロボットと言う要するにロボットだ。高見研究所前所長、高見誠司により人類をカオスと呼ばれる怪物から守るが故に生み出された…と言っても某鉄腕ロボットやヤッターヤッター煩いロボットなどと違って戦闘用の能力は無いため上、某タヌキ型ロボットの様に

秘密の道具が腹の辺りからでくるわけでも無いのでこの様にG5を装着している…と言うわけだ。

今は前所長の息子や同じロボットの仲間と共にこの様に人類を守るため毎日では無いものの戦っている。そして今夜はたまたま当たりの日だった。

ダンダンダン！！

銃声が響く。ツバサはスコープ越しに確実に捉えて追い続ける。

「待て！！」

ダンダン！！全弾命中の様だ。

命中を確認してもう一度引き金を引こうとすると突然フツとペルシヤネコサイラがスコープから逃げそのまま見失ってしまった。

「あ、クソ！！」

「…逃げたのか？」

「ハイ…すみません、逃がしました」

後ろからやって来た赤の大きな複眼を持ち、黒を基調とする…というかほとんど黒色のスタイリッシュなボディをした者 - 仮面ライダーBESTにそう告げる。

「奴はすばしっこいからな…しかし犠牲は増やせない、ツバサ、お前はここより東を頼んだ！俺は西に行く！」

「了解です！」

そう言うつとすぐにBESTは西へ走って行った。ツバサもショットの弾を詰め替えた後走って東へ駆けた。

――

「もう！ホント最悪！！」

なんで私だけがこんな目に合うの！？そう思いながら歩く1人の女性：谷 美琴は街中を怒りに任せて歩いていった。彼女が怒っている

理由は二週間前に遡る…

『なあ、美琴！』

『なあに？涼くん』

美琴に話しかける男…美琴の彼氏である日向 涼太はその優しい柔らかな笑顔でこう言う。

『二週間後さ、デートしようよ！』

『うん！！いつ？』

『じゃあさ、18時に…そうだなあ、中央公園の時計の下はどう？』

『分かった！』

そう言うのと笑う2人。

が、彼は二週間後である今日、18時にそこに来なかった…

それでも彼女は待ち続けた。早く来て…ただその思いだけ寒空の下待ち続けた。

その思いが実つたのか漸く二時間たった20時前にやっと彼は中央公園に来た…右横に女性を連れて。

『あ…』

『あ…』

『涼…くん？』

『…』

『ねえ、涼くん？』

『…』

『何この女、気持ち悪い』

『え…』

『行こう、涼太』

『…』

『え…』

彼女は泣きそして怒った。そして、今の今までただ人々で賑わう渚

沙の街を歩いていた。

お店のショーウィンドウには大きなモノから小さなモノ、はたまた真つ白なモノまで様々なクリスマスツリーが並ぶ…中には近くの園児が作った様なツリーも並んでいた。街は人が溢れ、音楽が溢れ、光が溢れていた。

彼女はただ涙を流す事しか出来なかった。枯れる事の無い雫がメイクを落とし地面に落ちていく。街は9時を過ぎた今も賑やかだった。光で溢れ、笑顔が咲き乱れる。そんな中を彼女だけが泣きながらただアテもなく歩く。足は止まる事を知らなかった。

――

「いない…どこだ!？」

まだ路地から出ていないはず…いや、出ていたら騒ぎはここまで聞こえるだろう…では何処にいる!? 大きな赤の複眼の下でツバサは目を瞑る。ヤツはもう殺戮者だ。ただ欲望のままに人という人をその爪で裂いていくだろう。いつもなら殺戮者となるその前に食い止めるのだが、久しぶりにしくじってしまった…いや、そんな事は今はおいておこう。ヤツがいる場所…何処にいる……………

ツバサは目を開き突然路地の闇の中へ二発弾丸を撃ち込んだ。

「ぐー!」

鈍い声が聞こえる…ペルシャネコサイラだ。ツバサは「待て!」とだけ声を発しその方向へ走り出した。

――

カツカツカツ…靴から音を立てながら道をただ歩く…足は既に疲れた、だけど歩みが止まらない…止めたくない…何も考えたくない…何も…

「あれ？」

気がつくとは何時の間にか大通りから外れ路地の中を迷っていた。知らない道、大通りに戻ろうにも随分路地を進んでしまったようでイルミネーションの光も街中にあふれる音楽も全く聞こえなかった…

「…さむ…い…」

路地にしゃがみ込む…見上げても頭上の小さな電灯以外何も見えな  
い…寒い…

「あ…」

暗い空から冬の結晶が舞い降りて来た…ヒラヒラ舞い落ちその一つ  
が手の甲に落ちる…それは体温で直ぐに水となり手の先から落ちる…

「雪…」

そう思ってみると結構降ってきたらしく既に路面は白くなっていた。  
それを見ると彼女はまた俯き枯れたはずの涙が溢れ出していた。

――

「あー、もー！クソ！速いんですよ、あいつ！」

ツバサはただをこねながら走る…どうやらまたサイラを見失ったよ  
うだ。

ロボットに疲れは無い、だから永遠に走ることが出来るのだが問題はG5が先の戦いでショートした箇所が直りきっていないのと充電不十分の為にいつもより電力の減りが早い…このままG5の電力が無くなれば攻撃手段は無くなってしまふ…それを恐れたツバサはG-01ショットをそのままに変身を解除した。視界が急に開けると、電灯の下に何かを発見した。

「あ、あれ？なんであんなトコロに人…？」



いくら路地とは言えこの辺りは人通りが少ない。だからあんなトコ  
口に人がいるとは思わなかった。  
…とりあえずここから離れてもらおう…そう思ったツバサは電灯の  
下に向かった。

――

「すみません…」

声がかかる…誰を呼んでいるのだろう…私か…正直今は…ほづつて  
おいてほしい…

「すみません！」

また声がかかる…誰？…なんで私に話しかけるの…？

「すみーまーせーん！！」

「はい？」

美琴は少し怒った口調で返事をし声の主を見る…柔らかな笑顔が目  
に入る…この…顔は…

「あ、良かった！ここで寝たら凍死しちゃいますよ！あ、そうだ、  
ちよつとここは…」

「……くん……」

「…へ？」

「涼くん!？」

「は!？」

美琴は驚いた…涼くんが…なんで!?!…そう叫びたかったが声に出  
ず体を逆にしたハイハイで後退した…

「こっこないで!！」

「え!？」

なおも涼太は少しずつ迫ってくる…「来ないで!」「イヤ!！」と  
叫びを発する…後退しながら美琴は見てしまった…彼の右手に握ら  
れている…物騒な銃を…

「イヤアアアアアアツ!！」

「あ！ちよつと!?!」  
美琴は逃げた…殺られる…殺られる！…逃げないと殺られる！…  
その一心で走った。走った。走った。後ろから足音がする…より足  
に力を込めて走る…カッカッカッと夜道に足音が響いた。

――

何処まで逃げただろう…

美琴はずつと走り続け遂に体力に限界がきた…ショックと恐怖が全  
身を駆け巡りただブルブル震えながら地面に屈伏していた。

涼太が私を殺しに…

そう考えるとより一層身を丸めたただ恐怖に震えることしか出来な  
かった。

…当然、忍び寄る影の事など知る由も無かった。

「あ、人間はつけ〜ん」

不意に声が聞こえる…美琴は声のした方を見る…そこにはペルシャ  
ネコサイラがいた。

「きやあああああああ!!」

「叫んだって無駄だよ、君は僕に斬られる運命。僕を満たすだけの  
働きをしてね」

そうついつつ爪を構え少しずつ近づいてくるサイラ…美琴はもう後  
退する力もなく声も出さず目に涙を浮かべて恐怖に飲まれていた。

「あれ？逃げないんだ？ふーん…じゃ、遠慮無く…」

サイラは右手をスツと上にあげる丁度月光が爪を照らし反射する…  
鋭く光るその爪がより恐怖を生む…もう、終わった…美琴は目を瞑  
る…サイラは思い切り右腕を振り下ろす

バシイイイイイイイーン！！

鈍い金属音が暗闇に響く。

美琴は目を開く…手は顔を押さえる…傷は？無い…死んでるの？いや、感触がある…体を上げる。するとサイラと美琴の間には一人の…いや、一体のモノがいた。

「え…？」

「大丈夫ですか？」

ニコツと笑ながら美琴の方を見る…それは…

「涼…くん？」

「いえいえ違います、ただのロボットですよ」

そういつつ右手を腰に回しベルトに挿していたG - 01ショットでサイラを狙撃する…ご丁寧にも足も撃つてこれ以上逃げられるのも防ぎつつ…

「だって、その顔…」

「顔ですか？ああ、ヤツの爪で左の方裂かれちゃいましたね」

相変わらずニコリと笑顔で対応するそのロボット…よく見ると左頬を裂かれていてそこから機械が露出している…そこで美琴は始めて気づいた…彼が涼太出ない事に…

「それにしても…サイラは体の左を斬るのが好きだなア…左腕を持つて行くとは…」

そう言う彼の左腕は地面に転がっているが本来流れるはずの血は出ておらずただバチバチと音を立てて落ちていた。

「立てますか？」

ロボットは美琴に尋ねる…今スグにでも逃げたい…けどもうこれ以上彼女の体は意思に従ってくれないようだ…彼女は首を横に振る。「困ったなあ」とそのロボットは笑いながらG - 01ショットで敬遠しながら美琴に告げる。

「では、この場所から絶対動かないでもらえませんか？少々時間がかかるかもしれませんが、耐えて下さい、ね？」

そう言うとその顔から笑顔が消えた。ただサイラの一点だけを睨んでいた。彼はベルトを弄る…。すると妙な機械音が鳴り響く。

P i P i P i G 5!!

すると蒼いプラズマが彼を包み込む…。強い風が起き光が闇を裂く…。そしてそのプラズマが消えたと同時に彼ではない一人の戦士が現れた…。赤の大きな複眼を持つ青の戦士、仮面ライダーG5だ。

突然現れたG5に驚いている美琴にG5はこう告げ足した。

「あ、そうだ。すみませんがこの事は決して口外し無い様をお願いします。厳守、お願いしますね?」

そう優しく告げるとまたサイラの方を向き身構える。その右手には何時の間にかG-02チェンソーが装備されていた。

「行くぞ…。ハアッ!」

G5の叫び声と共に両者の刃がぶつかり合う。

キイイイイイイイイイイイン!!

火花が暗闇を照らした。

これはある聖なる夜の物語…

雪は尚も途絶える事無く、月は雲の間から光を射し、一人の女性を巡る彼らの…。人を恨む者と人を護る者の戦いを見守っていた…

あれ？予告したより出来が悪い！！  
すみません…待っていらっしやった方…いないか（笑）

Episode 0 ツバサ編、いかがでしたでしょうか？実はコレ、10月にアイディアは思いついたんですが中身がついて来なかったため保留になってたモノです。

だって美琴とか誰？涼太とか誰？？ですし

あ、美琴と涼太はこれ以降出る予定無しです。本格的に出すのはイヤです。ごちゃごちゃして分からなくなりまーす。

ツバサが主役とはなんか新しいですね！第一話から出てたのに！

あ、エリカやダイキのEpisode 0は未定です。もうダイキは主役回があつたし。エリカ変身しないし。

大智すまん、お前が活躍するのはまた今度でいいな！

あの、間違わないで下さいね、仮面ライダーBESTの一番メインの主人公は高見大智ですからね

高見誠司（大智's パパン）でも無いですからね

さて、次回からどうしましょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1916w/>

---

仮面ライダーBEST ~一番となる者のキセキ~

2011年12月24日09時46分発行